資料

弘前藩の刑法典（十四）—寛政律—

付『御用格』二十二（国立史料館所蔵）

橋本久

目次

はじめに
一　安永律　〔第六号〕
付1『御刑罰御定』（安永律）　〔第十三号〕
付6『要記秘鑑』三十三　安永四年八月二十六日条　〔第二十号〕
二　寛政律
（一）『御刑法書之写』　〔第七号〕
（二）『寛政律』（その一）　〔第八号〕
（三）『寛政律』（その二）　〔第十一号〕
（四）『寛政律』（その三）
付2『隠商過料定牒』
付3『人別方御用取扱条例』『人別調方取扱条例』　〔第十三号〕
（五）『寛政律』（その四）
補訂1『藩法史料集成』所収「弘前藩御刑法牒」　〔第十四号〕
（六）『寛政律』（その五）
付4『諸取引御触書』『公義御書付留』『公義御触書留』
付5（参考）『公事訴訟取捌』　〔第十五号〕
（七）『寛政律』（その六）　〔第十七号〕
（八）『寛政改正御刑法帳』　〔第十九号〕
（九）『寛政改正　刑律』　〔第二十号〕
付6『要記秘鑑』三十三　〔第十七・十九・二十号〕

（十）『寛政九年　刑法』　〔第二十一号〕
（十一）『法律秘略』　〔第二十二号〕
付7『要記秘鑑』三十四　〔第二十一・二十二号〕
（十二）〔寛政律〕
付8『御用格』二十一　〔第二十三号〕
（十三）『和律』
付9『御用格』二十二　〔本　号〕
（十四）以下
三　文化律

二　寛政律

（十三）『和律』

凡例

一　原本は弘前市立弘前図書館所蔵本（GK三二二一・五-二三九）を用いた。

一　字体・字配りは、できるかぎり原本にしたがった。異体字・変体仮名については、かならずしも原本通りではない。

一　原本の塗抹は元字の左にミを付し、右に訂正した文字を記した。

一　原本の行末が次行に及んだ場合は、行末を示すために」をくわえた。

一　原本には見られないが、各項目の前に適宜行間を空けた。

一　原本の丁数・表裏を各終行末に〔　〕で示した。

一　便宜上、（二）～（十二）に倣い、各項目に一、二、三、……、各条文に仮番号1、2、3、……等の数字を付した。ただし条文番号の18～21は尽く。

一　他に適宜書き加えた箇所は〔　〕で示した。

一　変体仮名・異体字等に対応する仮名・正字を〔　〕で示すのは一箇所にとどめた。

〔表紙〕

和律　全

〔縦 24.6cm，横 17.1cm〕

目録

〔一〕一戸〆之次第
〔二〕一鞭刑之次第
〔三〕一同追放之次第
〔四〕一徒刑之次第
〔五〕一死刑之次第
〔六〕一贖刑之次第
〔七〕一五逆之事
但悪逆不道大不敬不孝不義
〔八〕一老幼廃疾之事
〔九〕一科人ハ酋(首)従可分事
〔一〇〕一人ニ而二罪有之事
〔一一〕一五斬(斬)組合列坐可及
ヶ條之事
〔一二〕一科人自身申出ル者
〔一三〕一親族ハ罪ヲ隠御用捨之事
〔一四〕一親族軽重之事
〔一五〕一罪可減者累減ヲ得事
〔一六〕一婦人犯罪之事
〔一七〕一不義之財物取捌之事
〔一八〕一同類之内出奔有之片口
相成ゝ(候)者之事
〔一九〕一罪科加減之例
〔二〇〕一欠所之事
〔二一〕一取押物之事
〔二二〕一人ヲ謀而殺ゐ者之事
〔二三〕欠
〔二四〕一親族之謀殺
〔二五〕一謀而主人ヲ殺者
〔二六〕一姦因而夫ヲ殺者
〔二七〕一一家三人ヲ殺ゐ者

〔一オ〕

料

〔二八〕一頭分之者謀殺致〔候〕ゝ者

〔二九〕一咒謀毒薬之事

〔三〇〕一打擲ニ而人ヲ殺ゟ者

資

〔三一〕一怪我ニ而人ヲ殺者

〔三二〕一夫有罪之妻妾ヲ殺者

〔三三〕一人ヲ過〔疑〕而死ヲ致者

〔三四〕一人殺之者内済致〔候〕ゝ者

〔三五〕一喧咤打擲ハ疵ノ軽重ヲ以罪ヲ迚〔定〕ゟ事

〔三六〕一疵療治之事

〔三八〕一下人主人ヲ打擲致〔候〕ゝ者事

〔三七〕一勢ヲ以人ヲ縛打擲致ゝ者之事

〔四〇〕一兄弟之打擲

〔三九〕一妻妾夫ヲ打擲致ゟ之事

〔四二〕一父祖人ニ被打擲其子孫返打之事

〔四一〕一師匠ヲ打擲

〔四三〕一竊盗之事

〔四四〕一御城中入盗之事

〔四五〕一自分預物紛失致ゝ者ノ事

〔一ウ〕

〔四六〕一御藏ノ財物盗取ゝ者之事

〔四七〕一強盗之事

〔四八〕一白昼人ノ物ヲ搶〔奪〕ゟ者之事

〔四九〕欠

〔五〇〕一馬盗之事

〔五一〕一盗杣之事

〔五二〕一流木流失盗物之事

〔五三〕一田野之穀物盗取ゝ者之事

〔五四〕欠

〔五五〕一盗人ノ宿致ゝ者之事

〔五六〕欠

〔五七〕一入墨ヲ抜取ゟ者

〔五八〕一謀書謀判致ゝ者

〔五九〕一役人ヲ似セゟ者之事

〔六〇〕一似セ金銀造るゝ者

〔六一〕一狂〔狂〕法賄賂之事

〔二オ〕

〔六二〕欠

〔六三〕一坐贓之事

〔六四〕一賄賂約諾致ゟ者

〔六五〕一賄賂ヲ行ゟ者之事

〔六六〕一茂合取立私曲ゟ者之事

〔六七〕一隠田畑之事

〔六八〕一田畑質入之事

〔六九〕一田畑押領之事

〔七〇〕一御収納遅滞
〔七一〕一内借之事
〔七二〕一手越ニ訴状差出ゝ者之事
〔七三〕一無名之訴状之事
〔七四〕一不実之事訴状致ゝ者事
〔七五〕一親族相訴候者
〔七六〕一子孫父母之教ニ背ゆ者之事
〔七七〕一訴状之腰推致ゝ者
〔七八〕一強訴之事
〔七九〕一隠津出之事
〔八〇〕一隠荷揚之事
〔八一〕一隠商賣之事
〔八二〕一博奕之事
〔八三〕一御用事ヲ頼合致ゝ者之事
〔八四〕一人ノ罪ヲ軽重致ゝ者之事
〔八五〕一失火之事
〔八六　欠〕
〔八七〕一御觸ニ背キゆ者
〔八八〕一不可為義ヲ致ゝ者
〔八九〕一科人手向致ゝもの
〔九〇〕一科人出奔之事

〔二ウ〕

〔九一〕一科人ヲ隠ゝ者
〔九二〕一私ニ升秤造ゆもの
〔九三〕一御關所忍通候もの
〔九四〕一立帰リもの之事
〔九五〕一馬札紛失之事
〔九六〕一姦淫之事
〔九七〕一僧尼犯姦之事
〔九八　欠〕
〔九九〕一相對死之事
〔一〇〇〕一隠遊女之事

以上

〔三オ〕

一戸〆　一明律笞刑
五日　十
十日　二十
十五日　三十
廿日　四十
三十日　五十
一鞭刑　一明律杖刑
三　六十

六　七十
九　八十
十二　九十
十五　一百　〔三ウ〕

一鞭刑追放　一明律徒刑
十八所拂　一年〔杖〕六十
廿一三里　一年半杖七十
廿四五里　二年　杖八十
廿七七里　二年半杖九十
三十十里　三年杖一百

大場御構

一徒刑　一明律流徒
半年　鞭三十　二千里杖一百
一年　鞭三十　二千五百里杖一百
一年半鞭三十　三千里杖一百　〔四オ〕

一死刑　一明律死刑
斬　絞
獄門　斬　秋後
火刑

火刑ハ火附ヲ極之重科ニ相立ヽ

公義御定ニ付明律相當ナシ

磔　斬　即次

一御刑法御定
定例
御刑法名目

一　戸〆五
戸〆之儀是迄ハ日数幾日相成ヽ間御免ヒ仰付ヽ様〔四ウ〕
申出ヽ得共以來幾日戸〆ヒ仰付ヽ様ニ与日数
記申上ヽ儀辰八月伺済

1　一戸〆
五　日　十日
十五日　廿日
三十日
但子兄弟或ハ奉公人之類戸〆難相成者右之日数之通
過料人夫或ハ百六拾文積ヲ以過〔村〕銭差出ヽ事

二　一鞭刑五
2　鞭　三　〔同〕公六
公　九　公十二
公十五

三 一鞭刑追放 〔五オ〕

3 鞭十八所拂 仝廿一三里 仝十五 六貫文

仝廿四五里 仝廿七七里 仝十八 十二〆文

仝三十十里大場御搆 仝廿一 十五〆文

但追放ハ鞭十八以上ニゟ得共其罪之子細ニ寄難差置 仝廿四 十八〆文

ものハ鞭数ニ不抱所拂可致ゝ事 仝廿七 弐十一〆文

四 一徒刑三 仝三十 二十四〆文 〔六オ〕

4 徒半年 鞭三十 仝一年仝三十 徒半年 三十貫文

仝一年半仝三十 仝一年 三十三〆文

但徒刑之ものハ銅鉛山江差遣鞭刑之上年限之通 仝一年半 三十六〆文

苦使可致事 死罪 四十弐〆文

五 一死刑 右過料ハ老幼癈疾之類刑ニ不可行者并過ニ而人ヲ

5 斬 獄門 磔 火刑 〔五ウ〕 殺或ハ疵付キゟ相當ゟ過料ニ而罪ヲ贖セ可申事

六 一贖刑 7 一過料之もの若貧困ニ而上納難相成ものハ銅鉛山へ

6 鞭 三 過料 三貫六百文 差遣一日六十文之積ヲ以夫役小使ニ可申輩老幼癈疾

仝 六 四貫弐百文 之類夫役ゟも難相成ものハ其身窄舍之上一年或ハ

仝 九 四〆八百文 二年ニ而御用捨可致事

仝十二 五〆四百文

七 一五逆之事 〔六ウ〕

8 一悪逆

祖父母父母ヲ打擲いたし或ハ殺左んと謀り并伯叔父姑兄

姉母方之祖父母ヲ殺し夫ヲ殺候もの丶事

9 一不道

一家之内死罪ニ阿らさるもの三人ヲ殺し并人ノ支體ヲ切解きむごく切害いたしゆもの丶事

10 一大不敬

御宗廟御飾物并御召物ネヲ盗取丶もの丶了〔候〕〔の〕

11 一不孝

祖父母父母之事ヲ訴或ハ悪口之父母之扱不宜難澁せしむるもの丶事〔マヽ〕〔七オ〕

12 一不義

支配のもの頭分之者殺し弟子〔と〕して師匠ヲ殺しゆもの丶事

八

13 一老幼癈疾之事

一歳七十歳以上十五才已下癈疾之者死罪以下贖ニ而用捨可致事八十以上十才以下死罪ヲ犯丶ものハ上聞之上時宜御沙汰可仰付丶事盗賊并人ニ疵付候もの贖ヲ出させ可申事其余之罪ハ御構無之九十以上七才以下ハ死罪ニも刑を不可加へ事

但罪ヲ犯候節未老疾ニ無之ゆ共事顕丶節老疾ニゆへハ老疾ヲ以沙汰可致丶事幼少之節犯し壮年ニ至リ事顕丶節ハ幼少之例を以沙汰可致事

14 一癈疾之事惣而人事ニむつ連ゆ片輪病人を云也馬鹿〔七ウ〕乱心之類茂癈疾と可致事

九

一科人ハ酋〔首〕従ヲ可分事

15 二人已上申合犯罪候輩ハ其内趣意相企丶者ハ酋と致丶事其余者徒と致丶事徒之ものハ酋ゟ罪一等ヲ可減事尤本文ニ同類不残と阿るハ酋従之差別無之事

一〇

16 一壱人ニ而二罪有之事

凡二罪共ニ顕丶節者重き物一ヶ条ヲ以罪を定丶事若一罪先ニ顕連既ニ刑を加へ丶後外之罪顕丶節者軽キもの并同等之科ハ御沙汰ニ不及若跡ニ顕連科重くゆハ丶沙汰直しいたし前罪之鞭数差引残鞭数〔八オ〕刑ヲ加へ丶事

一一

17 一五軒組合連坐ニ可及ヶ條之事

一隠田畑　一隠津出

一盗柚　一博奕之宿

一隠賣買

右ヶ條之内罪ヲ犯ヽもの組合之もの本人ノ罪ニ相
當ヲ以過料ニ直し組合四軒より差出セヽ事
但組合四軒ニ不満ゆ者ハ四軒之割合ヲ以不足分ハ用捨事

一二一科人自身申出ル者

22 一惣而悪事いたしヽもの事未顕已前自身申出ニ於ハ其
罪御用捨ヒ仰付ヽ事但人ヲ疵附或ハ相手寄不可償〔八ウ〕
品并姦通ノ類不許事

23 一覆〔マヽ〕盗或ハ手段ホニ而人之財物ヲ取其後過ヲ悔ゆ而自身
と本人江返ヽものハ上ニ申出と同前之科可許事

一三一親族ハ罪ヲ隠候而も御用捨之事

24 一父母兄弟伯叔父夫婦之間罪有之相隠ヽ而も御咎無
事但其事洩逃〔ヒ〕者志〔ヒ〕むる共不可罪事家來主人ノ
為ニ隠ヽも是又同然之事外妻之父母娘ノ聟夫ノ
兄弟相隠ヽ節平人より罪三等ヲ減可申事

一四一親族軽重之事

25 一本文ニ祖父母と阿るハ高祖曽祖同様之事孫と阿るハ
曽孫玄孫同様之事嫡孫承祖ハ父母と同様嫡母養〔九オ〕
母ハ実母と同様之事

一五一罪可減ものハ累減を得候事

26 一縦ハ罪を犯ヽもの酋を従と有之時其従之もの
ハ罪一等ヲ減候上其者外ニ可減子細有之時ハ亦幾
ホも段ミニ減可申事

一六一婦人犯罪ヲ候事

27 一婦人之犯罪ハ鞭十五ニ不可過鞭十五以上相當ヽ節
十五鞭切ニて残る数ハ過料ニ而罪を償可申事

28 一婦人之鞭刑ハ孺半之上より打可申事但姦淫之罪ハ
衣を去直ニ可打事竊盗之類ハ入墨可許事

一七一不義之財物取捌之事〔九ウ〕

29 一財物之上ニ而罪ヲ犯ヽ者本人相手共ニ罪有之時ハ
其財物没収可致事若相手方有罪本人罪無之
時ハ其財物本人江相返ヽ事

30 一財物之没収可致もの并本人江可相返もの既ニ費
用〔候〕ヽハヽ償可令出候事若科人身死ニ而品物費用
之節ハ取上ニ不及事

一八一同類之内出奔有之片口ニ相成〔候〕、もの〔之〕、事

31 一同類之内壱人ハ出奔いたし壱人召捕、節其もの出奔致、ものを本人之旨申出別ニ證人無之時ハ其ものハ徒〔従〕といたし刑を加へ可申事其後出奔致ゐものヲ召捕ゐ而糺明いたし、節最初申もの　〔一〇オ〕本人ニ相違無之ハ則従といたし残る刑ヲ加へ、事

一九一罪科加減之例

32 〔一〕加とハ本罪之上ニ猶加へて重くいたしゐ事減と云ハ本罪之上ニ猶減て軽くいたしゐ事但減ゐ節ハ四段之死罪三段之徒各一等といたし減し、事鞭刑ニ至てハ三鞭ツ、之一等ヲ減可申事加、節ハ一段毎ゑ一等と改ゐ事猶加減ハ徒一年半鞭三十限ニ而加へて死ニ不可入加て死ゑ可入ものハ其ケ条ニ其断〔訳〕有之事

二〇一欠所之事

33 一欠所之事鞭三十已上専利欲ニ拘ゐ科ハ其利欲軽重ニ寄田畑或ハ家屋敷家財ゑ欠所可申付、事〔一〇ウ〕重罪ニも利欲ニ不抱ものハ律ニケ条出、外ハ欠所不可致事

二一一取押物之事

34 〔一〕惣而禁ヲ犯し物を取候義其懸合役筋之ものニ無之、へハ其品取押ゐものへ被下、事其役筋ニ而取押ゐへハ押物多少ニ寄御賞ヒ下置其品ハ没収可致、事

人命

二三一人ヲ謀而殺候者

35 一宿意ヲ以謀而人ヲ殺、もの其張本人ハ獄門加擔手傳致、ものハ斬罪加談斗ニ而手傳不致　〔一一オ〕ものハ徒壱年半鞭三十

36 一疵付、斗ニて不死時ハ張本人ハ斬罪加談手傳ハ徒一年半鞭三十

37 一謀殺之事行ゐへハ疵付ヰ不申共張本人鞭三十加談手傳之者ハ鞭十五

38 一右之張本人縦ハ其場ニ不臨、共殺ゐ節其身手ニ掛殺、同然疵付、節者手ニ掛疵付、同然之事加擔之者ハ其場ニ不臨ゐへハ其場ニ臨、ものより罪一等ヲ許可申事

39 一若因之財宝ヲ取ゐへハ強盗之律ニ随ひ張本人加

談之差別無之不残磔但同行之内ニ而も財ヲ分ケ〔一一ウ〕
不申ゐへハ謀殺之律ニ而捌ゐ事

二三一謀而親を殺候もの

40 一謀而親ヲ殺ゝもの男女ゟ不限肆之者鋸引婦
人夫之父母ヲ殺ゐもの同前
但鋸引之者ハ罪次第建札いたし於往來道路
肆ゐ事三日往來之者勝手次第鋸引致セ右日
限相済まて鋸引致ゝ者無之節ハ其節引廻
之上磔

41 一弑逆之事既ニ行ゐ得共縦疵付不申共磔

42 一親類(殺)之もの妻子不残遠追放家屋敷家財欠
所但子ニ而も別居之ものハ御用捨之事

43 一親殺之もの於自滅ハ死骸塩漬之上磔〔一二オ〕

二四一親族之謀殺

44 一祖父母ヲ殺さんと謀既ニ行(ヒ)ニゐものハ獄門殺ゐへハ磔但
母方之祖父母同様

45 一婦人夫之父母夫殺ゐ而も右同様之事

46 一伯叔父姑婦謀殺既ニ行ゝへハ徒一年鞭三十疵付ゝへハ
獄門殺ゝへハ磔

〔47 欠〕

48 一伯叔父姑之甥姪ヲ謀殺ニ致兄姉之弟妹ヲ謀殺ゐも
のハ斬罪

二五一謀而主人ヲ殺ゐもの

49 一謀而主人ヲ殺ゐもの男女不限肆者鋸引疵付ゐへハ
凡而子ノ父母江對ゐと同様之事〔一二ウ〕

50 一下人之主人ヲ殺候者磔但下人主人ゟ暇出外奉公致
罷有本の主人殺ゝもの他之主人殺ゝもの同様

二六一姦ニ因て夫ヲ殺ゝもの

51 一妻妾他ノ人と姦通いたし因て夫ヲ殺ゝもの引廻之
上磔姦夫ハ獄門若男之手段而已ニて女其謀知らそ
といへ共女ハ斬罪又女の手段斗ニ而男其謀不知時ハ只
姦夫之刑ニ一等加て罪ニ行ゝ事

52 一妻妾人と姦通いたしゐヲ現在姦通之所ニ而見届即
時ニ殺ゐ者ハ御咎無之事若其場ヲ立去ゐ後訴も無之
擅ニ殺ゝもの喧嘩ニ而人ヲ殺ゐと同様之事〔一三オ〕

二七一一家三人ヲ殺ゐもの

53 一一家之内非死罪人ノ三人ヲ殺并人之支體ヲ切ホトキむさく殺害いたしゐもの引廻之上磔家財欠所死者之家へ被下、事妻子ハ遠追放加談いたしゐもの手傳致、もの共獄門

但追放之事別居之子ハ御用捨之事

二八一頭分之者謀殺いたしゐ者

54 一支配之もの頭分之者殺さんと謀既ニ行ゐへハ徒半年鞭三十疵付、へハ斬罪殺ゐ得ハ磔

二九一咒詛毒薬

55 一咒詛調伏ホヲ以人ヲ殺と謀ものハ謀殺之律ヲ以罪ヲ行ゐ事若只人ヲ苦めんと謀ゐへハ二等ヲ減ゐ事毒薬用るも同様之事毒薬ヲ買未用もの鞭三十其事ヲ知リ薬ヲ賣、もの同罪不知時ハ御咎無之〔一三ウ〕

三〇一打擲ニ而人ヲ殺、もの

56 一元ゟ巧ニて殺ゐニハ無之一時ニ〔マヽ〕喧咤打擲ニ而人ヲ殺、ものハ斬罪尤相手之方理不盡之致方ニ而不得止事於切害ハ相手之方親類名主詮義之上ヒ殺、もの平日不法之者ニ相違無之、ハ、死罪二等ヲ減可申事

57 一同謀而人ヲ打擲いたし因て死ニ至、へハ急所ノ疵ヲ得セ、ものを解死人ニ可致事但最初事を企、ものハ徒半年鞭三十余ノ人ハ何連鞭十五〔一四オ〕

三一一怪我ニ而人ヲ殺、者

58 一怪我ニ而人ヲ殺或ハ疵付、もの打擲之律ニ因て贖ヲ取其ものニヒ下置、事

59 一途中馬車ニ而人ヲ過チ、もの緩怠の事無之もの怪我ヲ以沙汰可致、事若不慎其儀於有之ハ打擲之律ヲ以刑を可加へ事

60 一危き仕業ヲい多し因て人ヲ殺、もの贖ニハ難相成打擲之律ヲ以刑を加へ可申事

61 一喧咤ホして因て傍人ヲ殺疵付、もの喧咤ニ而人ニ疵付、と可為同前事

62 一若又強而人ヲ殺さんとして過而別人ヲ殺疵付、もの謀殺ヲ以沙汰可致事〔一四ウ〕

三二一夫有罪之妻妾ヲ殺ゐ者

63 一妻妾夫ノ祖父母父母ヲ打擲ホニより其夫打之因て
死ニ至ヽへハ御構無之若又強而擅ニ殺ゆへハ鞭十五
但外之罪ホニより打殺ハ可為解死人事

64 一夫妻妾ヲ打擲或ハ罵等致ヽニ寄其妻妾自害之
ものハ不及御沙汰事
但重キ疵ホ負、節者夫妻妾ヲ打擲之律ヨ
依而沙汰可致事

三三 一人ヲ逼而死ヲ致候者

65 一支ニ依て人ヲ逼リ其人自殺致ヽもの鞭十五并金〔一五オ〕
弐両出さしめ死者之家江ヒ下ヽ事若妾ヲ行盗ヲ
い多しゆ為人ヲ逼リ死ヲ致ヽものハ獄門

三四 一人殺之者ヲ内済致ヽもの

66 一祖父母父母人ヲ為ニ殺さ連其子孫内済致ヽもの
徒一年半鞭三十五夫ヒ殺て内済いたしヽもの同然伯
叔父姑兄姉ハ二等ヲ減可申事若子孫人ノ為ニ被殺
祖父母父母内済いたしゆもの鞭九常人ノ内済ハ鞭三

67 一内済之為贈ヲ取ヽものハ銭之高ヲ以竊盗ニ準し
重き方ニ而沙汰可致事但父母被殺賄ヲ取ヽもの死罪

68 一同居或ハ同行之人初ゟ其人ヲ謀て害せんとする事
乍去(却)不留もの并殺さ連ゆ後不訴もの鞭十五〔一五ウ〕

一打擲

三五 一喧咤打擲ハ疵ノ軽重ヲ以罪ヲ定ゆ事

69 一手足或ハ外之物ヲ以打擲いたしヽもの戸メ十五日
疵付ヽへハ戸メ廿日
但打ゆ處不破共青赤ニ腫候ヲ疵ト定る事

70 一血鼻口之内より出或ハ内損血ヲ仕(吐)ゆもの鞭九不
浄ノ物ヲ以人之頭面ヲ汚ヽもの右同

71 一歯壱枚手足之指壱本ヲ折一目ヲ傷并耳鼻ヲ傷
候者鞭十五湯火を以人ヲ傷ヽもの不浄ヲ以人之口鼻
ヨ入ヽも同様之事

72 一歯弐枚指弐本以上ヲ折ゆものハ鞭十八〔一六オ〕

73 一人之骨ヲ折并両目ヲ傷メ或ハ婦人之胎ヲ堕し
并一切之刃物之切疵ハ鞭廿四但兵器ニ而も柄ヲ打ゆハ
刃物ニ無之事

74 一手壱本足壱本ヲ折一目ヲ潰しゆもの鞭三十

75 一両手足ヲ折或ハ両目ヲ潰し或ハ持病ホ有之所
因而癈疾ニ至ら志むるもの并人陰陽ヲ腸(傷)ヽもの

徒壱年半鞭三十右科人家財半分ヲ以疵付ゝもの
へ被下ゝ事
右條〻の科人大勢ニ而犯ゝ節其内疵付ゝ者ヲ
重罪ニ致ゝ事本趣意企ゝ者ハ疵付不申ゝ共其
次之科ニ申付ゝ事但疵ヲ得ゝもの若死ニ至ゝへハ
同行之内人ヲ殺ゟ節不留ノ律ニ依而鞭十五〔一六ウ〕

76 一〔喧咤ニ而双方疵有無之事〕
一喧咤ニ而双方疵ヲ得ゝ節双方疵相改疵ノ軽
重ニ而罪ヲ定ゝ事尤跡ゟ手ヲ下し理直き方ハ
二等ヲ減可申事

三六一疵療治之事

77 一疵ヲ蒙ゝもの日切ヲ立打擲之者ゟ療治を致さ
しむへき事日限之内〔死〕取かへハ打擲之者可為
解死人事若日限之内ニ而も疵平愈致ゝ断
差出ゝ後余病ニ而死ゝへハ只打擲之罪可加へ事

78 一指壱本ヲ折ゟ已上之疵日限之内療治ゝ而平
愈致ゝへハ罪二等ヲ可減日限満る日迄平愈〔一七オ〕
無之ものハ右之本律ヲ以相用へ候事尤婦人
破産并病氣平愈ニ而も痛疾ゟニ至リゝハ、罪減

申間敷事

79 一手足其外之物ニて軽き打疵ハ廿日限金創火
毒ハ三十日切手足ヲ折骨痛ミ婦人之堕胎ハ五十日

三七一勢ヲ以人ヲ縛リ打擲いたしゟ者

80 一争論ゟ依て人ヲ縛リ打擲いたし或ハ於私家人ヲ押
篭メゟ致ゝもの鞭九若疵重く内損吐血已上ニ至ゝへハ
平人打擲より二等ヲ加へ可申事尤自分手ヲ下リ
不申右差圖致ゝもの本罪ニ可致事差圖ヲ受手ヲ
下ゟ者一等ヲ減可申事〔一七ウ〕

三八一下人主人ヲ打擲致ゝ者

81 一下人として主人ヲ打擲いたし、もの獄門死ニ至、へハ
鋸引怪我ニ而殺、へハ斬罪怪我ニ而疵付、へハ徒
壱年半鞭三十

82 一主人下人ヲ打擲いたし、もの軽き疵ハ御沙汰ニ不
及事打破已上之疵ハ平人打擲ゟ四等減可申
事死ニ至リ、へハ鞭十八怪我ニ而殺、へハ御沙汰不及事

三九一妻妾夫ヲ打擲致、もの

83 一妻夫ヲ打擲いたし、ものハ鞭十五打傷以上之疵ハ平
人より三等ヲ加へ可申事一目ヲ潰、以上斬罪死ニ至リ、
ヘハ磔

84 一若妾ハ夫并妻ヲ打擲致、ヘハ又一等ヲ加へ可申死ニ至、〔一八オ〕
ヘハ」磔尤加るものハ加て死ニ入、事

85 一夫妻ヲ打擲致、もの打痛已上ニ阿らさ連ハ御沙汰
不及事右以上ハ平人ノ律ゟ二等ヲ減可申事死ニ至、
ヘハ斬罪妾ヲ打擲いたし打傷已上ニ至リ、ヘハ又二等ヲ

86 減可申事死ニ至、ヘハ鞭三十妻之妾ヲ打擲致、ヘハ
夫ノ妻ヲ打擲致、同様之事怪我ニ而殺、ハ其證
據分明ニおいてハ不及御沙汰事

四〇一兄弟之打擲

87 一弟并妹として兄姉ヲ打擲致、者鞭廿七疵付、ヘハ鞭
三十打傷ハ徒一年半刃傷ニ及手足ヲ折一目ヲ潰、已
上ハ斬罪死ニ至リ、ヘハ獄門伯叔父姑ヲ打擲致、者〔一八ウ〕
同様之事怪我ニ而殺或ハ疵付、もの本殺傷ノ罪
二等ヲ減可申事尤贖ニハ難相成、

88 一兄姉ノ身として弟妹ヲ打擲ニ而殺伯叔父姑之甥
姪ヲ打擲ニ而殺ハ鞭三十怪我ニ而殺證拠分明ニ於てハ
御沙汰ニ不及事

89 一子孫として祖父母父母ヲ打擲致、者并妻として舅
姑ヲ打擲致、もの獄門死ニ至、ヘハ鋸引怪我ニ而殺、ヘ
ハ斬罪

90 一祖父母父母子孫ヲ打擲ニ而殺、もの鞭十五継母ハ一等
加へ可申事但子孫祖父母父母罵リ或ハ打ゟニより依之
打擲いたし死ニ至、ヘハ御沙汰ニ及不申怪我ニ而殺も〔一九オ〕
同様之事

〔四一　欠〕

91 一師匠ヲ打擲致、もの平〔人、脱〕ニ二等ヲ加へ可申事殺、ものハ
磔

四二一父祖人ニ被打擲其子孫打返、者

92 一祖父母父母ノ為ニ打擲せら連其子孫救、ため返打
ゟ者軽キ疵ハ御沙汰不及打傷已上ニ至リ、ヘハ平人打
擲より三等ヲ減可申事死ニ至、ヘハ定法之通可為下
手人事

一盗賊

四三一竊盗

93　一盗致、もの入墨之上盗取、高ニ應軽重罪科可行事〔一九ウ〕

定

一十〆〆〔貫〕已下　入墨鞭三
一十〆以上　同　六
一廿〆以上　同　九
一三十〆以上　同　十二
一四十〆以上　同　十五
一五十〆以上　同　十八
一六十〆以上　同　廿一
一七十〆以上　同　廿四
一八十〆以上　同　廿七
一九十〆以上　同　三十〔二〇オ〕
一百〆以上　徒半年同三十
一百十〆以上　徒壱年同三十
一百廿〆以上　徒一年半同三十
一百三十〆以上　斬

斬但徒之者ハ死罪一等ヲ許候事

右銭高ヲ以罪之軽重ヲ定、義盗取、品幾人ニ而も分ゆ

而も分前之高ニ不抱盗取、本高ヲ以一人毎ニ罪ヲ加へゆ

事尤徒之ものハ一等ヲ減可申事但一時ニ数家〔マヽ〕ニ而於て盗取候、」節其内一家の財多き高ヲ罪ヲ定ゆ事米穀ゑハ時之直段ヲ以銭ニ直し品物直打致セ銭ニ差積可申事

94　一盗ニ入、もの財物ヲ取不申ゆへハ鞭三入墨ハ許之但人之土蔵ヲ破リ或ハ盗ニ入、次第ニ寄大盗ニ紛無之、ハ、財物ニ不抱入墨之上鞭三十〔二〇ウ〕

95　一入墨之義腕江廻し幅三〔分〕程入墨可致尤初度ハ右腕へ彫リ二度目ハ左へ彫三度目及、へハ不寄多少斬罪

四四一御城中江入盗致、者

96　一御城中江忍入盗いたし、者獄門

但寛政十一未年四月表坊主棟方嘉林隠居之後病屈ニ而御城へ紛入ゆニ付死罪一等御免徒刑ニヒ仰付、例

四五一自分預リ之物ヲ私曲いたし、者

97　一御預之物ヲ致私曲盗取、もの酉〔差別〕従節例無之盗取、銭高ヲ以罪ヲ定ゆ事尤幾人ニ而も分前之高ニ不抱盗取候本高ヲ以一人毎ニ罪加へゆ事〔二一オ〕

定

一二〆五百文以下　入墨鞭九
一二〆五百文以上　仝　十二
一五〆文以上　仝　十五
一七〆五百文以上　仝　十八
一十〆文以上　仝　廿一
一十二〆五百文以上　仝　廿四
一十五〆文以上　仝　廿七
一十七〆五百文以上　仝　三十
一二十〆文以上　徒半年鞭三十
一二十五〆文以上　徒一年鞭三十　〔二一ウ〕
一三十〆文以上　徒一年半鞭三十
一四十〆文以上　死罪ノ代リ徒二年鞭三十

四六一御藏之財物盗取丶者

98 一御藏之財物ヲ盗丶もの并御藏廻之者共御藏之財物ヲ私曲いたしゆもの首從ノ差別無之盗取丶錢高ヲ以罪ヲ定ゆ事尤幾人ニ分丶而も分前之高ニ不抱盗取丶本高ヲ以罪ヲ加へゆ事尤壱人毎ニ罪加へゆ事

定

一五〆　己下　入墨鞭六
一五〆以上　仝　九　〔二二オ〕
一十〆以上　仝　十二
一十五〆以上　仝　十五
一二十〆以上　仝　十八
一二十五〆以上　仝　廿一
一三十〆以上　仝　廿四
一三十五〆以上　仝　廿七
一四十〆以上　仝　三十
一四十五〆以上　徒半年　鞭三十
一五十〆以上　徒一年　仝三十
一五十五〆以上　徒一年半仝三十
一八十〆以上　斬　〔二二ウ〕
但御藏廻之者私曲いたし丶へハ死罪之代リ徒二年鞭三十

四七一強盗

99 一追剝強盗之者既ニ行ゆへハ財物ヲ取不申共徒一年半鞭三十既ニ財物取丶へハ同類不残磔

100 一盗ニ忍入、もの其家の人江手向いたし或ハ疵付ゆへハ強盗之御仕置たるへき事但同類之者助力不致ものハ竊盗ヲ以沙汰可致事

101 一若竊盗已ニ財物ヲ捨逃去ゆ而其家人追懸因而手向致、ものハ不用此律科人手向致、律ヲ以刑ヲ加候事

四八 一白昼人ノ物ヲ搶奪之者　〔二三オ〕

102 一白昼人之物ヲ奪取、もの鞭三十若取、品之高多ゆハ、竊盗之罪ニ二等ヲ可加へ事従ノもの一等ヲ可減事

103 一又難舟ゟ之節便ニ乗乱妨いたし、もの同様之事

104 一喧咤ゟいたし因て財物ヲ奪取、もの是又同様之事

105 一巾着切之類搶奪ニハ無之ゆ竊盗之律ヲ以刑ヲ加へゆ事

〔四九　欠〕

106 一盗ノ為火ヲ付、もの火刑但燃立不申ゆへハ斬罪

〔107　欠〕

五〇 一馬盗

108 一馬ヲ盗賣買いたしゆもの斬罪

五一 一盗杣

109 一盗杣取いたしゆもの杣取之多少ヲ以御蔵之財物盗取、律ヲ以刑ヲ可加へ事　〔二三ウ〕

110 一山師共過木伐取、もの伐出之過木不残取上伐出之多少ヲ以罪ヲ加へゆ事前条同様之事

111 一御留山ニ而柴薪木ゟ盗伐ゆ者過料壱〆文尤伐出高多、節ハ銭ニ差積一倍之過料可申付事御留山ニ無之共御停止木伐取、者同様之事

112 一山中伐荒有之科人不相知節者伐荒多少ヲ以山下村過料可申付事

但檜壱本代小杉百本杉雑木壱本代小杉五拾本

〔113　欠〕

114 一伐荒之場所江植付不相成所ハ手寄空山見立植付多時ハ三ヶ年五ヶ年之内　右ハ已〔三〕ノ年済　〔二四オ〕

五二 一流失流木盗揚之者

115 一出水之節流失流木取上、もの見分之上五ノ一山師より相渡可申事若隠置、而ヒ召出、節隠木多少ヲ以過料為差出、事

定

一拾本〔已〕已下　一〔貫〕〆弐百文
一拾本已上　一〆八百文
一弐拾本已上　二〆四百文
一三拾本以上　三〆文
一四十本已上　三〆六百文
一五十本以上　四〆弐百文
一六十本以上　四〆八百文　〔二四ウ〕
一七拾本以上　五〆四百文
一八拾本以上　六〆文
一九拾本以上　六〆六百文
一百本以上　七〆弐百文

五三一田野之穀物盗取ゆ者

116 一田野之穀物盗取、もの竊盗ニ準し多少ヲ以罪ヲ定、事但入墨同様之事

117 一柴草木石之類人功ヲ以伐取積置ヲ擅ニ取、もの是又同様之事但入墨免之

五四一夜中無故人家へ入、もの　〔二五オ〕

118 一夜中無故人之家江入、ものハ鞭三若其家人即時ニ殺、節ハ御搆無之若又既ニ捕置擅ニ打擲いたし疵付、ハ、平人打擲より二等ヲ減罪行ゆ事死ニ至リ、ヘハ鞭三

五五一盗之宿い多しゆもの

〔119 欠〕

120 一竊盗之宿いたし財物ヲ分取、ヘハ其身不行共竊盗之酋と可為同罪事財物ヲ取不申、ヘハ一等ヲ減可申事入墨同様之事

121 一強盗竊盗之盗物乍存買、もの品物銭ニ差積リ竊盗之律二等ヲ減罪ニ行ヒゆ事乍存預置、者又一等ヲ減、事但品物高多、共鞭十五ニ而許可申事若又不存、得者御搆無之品物ハ本人江返可申事　〔二五ウ〕

〔五六 欠〕

122 一手段ヲ設ケ人ヲ匂引（カトリカシ）ゆもの鞭三十因て人ヲ疵付、もの　斬罪

五七一入墨ヲ抜取、もの

123 一盗いたし入墨ニヒ行ゆもの其後竊ニ抜、もの
鞭三入墨仕直し可申事

五八一謀書謀判いたし、もの

124 一御印并奉行諸役人ノ判ヲ似セ造リ諸渡物ゑ盗取
ゆものハ獄門未財物ヲ不取ものハ死罪一等ヲ減可申事

125 一似セ印形似セ手紙或ハ古手形ヲ取拵公私之物ヲ取、もの
ハ」竊盗ニ準し錢之高ヲ以罪科之軽重ヲ可行事
但入墨竊盗同様 〔二六オ〕

126 一語らひ手段ニ而取、もの是又竊盗同様

127 一物取ニ無之申訳ノ為メ有合之印形押、類ハ竊盗ニ
準し一等を減可申事入墨免之

五九一役人ヲ似セゆもの

128 一在ゝ通リ役人ヲ似徃來之人馬賄ゑ差出、ものハ
鞭三十

六〇一似セ金銀ヲ造ゆもの

129 一似セ金造ゆもの并私ニ錢ヲ鑄ゆもの磔細工人同罪
其余加談之もの死罪一等ヲ減可申事但似セ金と乍
存通用いたし、者同様

一賄賂 〔二六ウ〕

六一一枉法賄賂之事
〔枉〕狂法之〔賊〕賊といふハ金銀貸財ヲ取て其罪ヲ見ノカ
シテヤルヲ枉法之〔賊〕賊といふ

130 一賄賂ヲ枉ゝる事ヲいたしゆもの錢之高ヲ以軽重之
罪ニ可行事尤何人ゟ受、而も惣錢押合其高ヲ以罪ヲ
相定、事若犯ゆ事重くゆハ、人の罪ヲ軽重いたし、
律ヲ以刑ヲ加へゆ事

定

一五〆已下	鞭 三	
一五〆以上	仝 九	
一十〆以上	仝十二	〔二七オ〕
一十五〆以上	仝十五	
一二十〆以上	仝十八	
一二十五〆以上	仝廿一	
一三十〆以上	仝廿四	
一三十五〆以上	仝廿七	
一四十〆以上	仝三十	

一四十五〆以上　徒半年鞭三十
一五十〆以上　徒一年仝三十
一五十五〆以上　徒一年半仝三十
一百廿〆以上　死罪ノ代徒二年鞭三十　〔二七ウ〕

六二一不狂(枉)法賄賂之事

法ハ枉子共賄賂ヲ受ゆヲ云

凡不義之財ヲ贓といふ

131

一賴を受銭ヲ取ゝへハ枉たる事ゟ無之ものハ惣銭之高押合半分ニして罪ヲ定ゆ事但壱人ゟ受ゆハ半分ニ可致事

定

一十〆以下　鞭三
一十〆以上　仝六
一二十〆以上　仝九
一三十〆以上　仝十二　〔二八オ〕
一四十〆以上　仝十五
一五十〆以上　仝十八
一六十〆以上　仝廿一
一七十〆以上　仝廿四
一八十〆以上　仝廿七
一九十〆以上　仝三十
一百〆以上　徒半年鞭三十
一百十〆以上　徒一年仝三十
一百二十〆以上　徒一年半仝三十

六三一坐賊之事　〔二八ウ〕

慈即功音藏夫受財也凡非理所得賄賂皆曰賊(贓)

132

一差而賴合ゝ事も無之通例只財ヲ受ゝ分ハ坐賊(贓)之罪ニ可行事尤惣銭半分ニ致ゝ者罪ヲ定ゝ事前条同様ノ事尤与へゝもの三等ヲ相減ゝ事

定

一十〆以下　戸〆廿日
一十〆以上　仝三十日
一廿〆以上　鞭三
一三十〆以上　仝六
一四十〆以上　仝九
一五十〆以上　仝十二　〔二九オ〕

一六十〆以上　仝十五
一七十〆以上　仝十八
一八十〆以上　仝廿一
一九十〆以上　仝廿四
一百〆以上　仝廿七
一百二十〆以上　仝三十

六四一賄賂約諾致丶者

133 一賄賂之約諾いたし未財物手ニ入不申共事扨丶
もの〔臣〕ハ狂法ニ準し一等ヲ減し罪ヲ加へ可申事約諾
のみニ而未叉ヲ狂不申ゆへハ不狂法準し一等ヲ減罪ヲ〔二九ウ〕
可加へ事

六五一賄賂ヲ行ゆ者之事

134 一下之者賴事有之賄賂ヲ行ゆ而法ヲ犯事ヲ
得丶へハ差出丶銭高ヲ以坐賊之律ニ當刑ヲ可加事尤
犯丶事重丶ハ丶重キ方ニ而沙汰可致事若上タル強而
無據差出丶ハ丶御咎無之事

六六一茂合取立私曲致丶者

135 一茂合銭為差出私用ニ致丶もの犯法ヲ以罪ニ行ゆ
事音信ニ相用へ自分使不申共同様之事

一田宅

六七　隱田畑　〔三〇オ〕

136 一隱田畑致丶もの一反歩より五反歩迄ハ鞭六五反歩
毎ニ一等加へ可申事但隱田畑御取上隱丶田畝一年之
年貢可差出事

137 一御検見之節悪地なとヲ振替見セ丶もの有之格
ニ而一等ヲ減可申事尤反歩多丶共鞭十五ニ而許可
申事村使之もの乍存見逃いたし置丶ハ丶本人同
罪之事若不存丶へハ五反歩已下ハ許之五反歩以上
ハ右之格ニ而三等ヲ減可申尤反畝多共鞭九ニ而許可
申事

六八一田畑質入

138 一年季ヲ以質入致丶田畑年季相済本人より元利返〔三〇ウ〕
済受戻しヲ求ゆへハ外事ニ託し又相返年来押領
いたし丶もの鞭三年來之小作米可令返事

六九一田畑之押領之事

139 〔一〕他人ノ田畑ヲ事ニ寄セ押領致、もの屋敷ハ一軒田畑ハ壱反歩より五反歩迄鞭三五歩歩毎ニ一等ヲ加へ可申事尤反歟多とも鞭十八ニ而用捨可致、事但年來ノ小作米令返事前条同様之事

七〇一御収納遅滞

140 一御収納ハ年〻十一月卅日迄皆済可致事若翌正月迄無故して皆済無之もの御収納高十分ニ割一分滞ゐへハ戸〆二十日一分毎ニ一等ヲ加へ可申事村役同様之事尤鞭九迄ニ而許可申事〔三一オ〕

七一一内借

141 御藏廻もの御藏の米銭内借致、者米銭之高ヲ以竊盗ニ準し罪ニ行可申事若懸之者ニ阿らさ連ハ一等ヲ減可申事但入壁ハ許之

〔142 欠〕

七二一訴訟ニ付手越之訴状

143 一訴状ヲ差出、者其向〻支配頭江差出可申、手越ニいたし奉行諸役人江差出、而も取上申間敷事若願難相成義ヲ強而手越ニ致、者戸〆三十日但願可相立筋ヲ支配頭ニ而取押置或ハ支配頭之非道ニ取扱有之ヲ訴ゐ類ハ可為格別、事〔三一ウ〕

七三一無名之訴状

144 一無名之訴状投文致、もの鞭三訴状之趣取立沙汰いたし間敷事

七四一不実事ヲ訴状いたしゐもの

145 一不実之事ヲ申出人ヲ罪ニ落さんとそる者鞭刑追放ゑ可被行事ヲ訴ゐへハ可為追放事若死罪ニ可相成義ヲ訴出、へハ鞭三十徒一年半

146 一若被訴候者御沙汰既ニ極て其罪被行、後不実之事顕、へハ罪ニヒ行ゐ者之刑ニ一等ヲ可加へ事死罪ニ被行、へハ」可為解死人事

147 一若弐ヶ条訴ゐ節軽キ事ハ実ニ而重キ者ハ偽或ゑ譬〔三二オ〕一事ニ而も軽き事重く申出、者鞭ノ内実事分ヲ差引残る鞭数ヲ以刑ニ行ゐ事

七五一親族訴ゑ者

148 一子孫として祖父母父母の事ヲ訴妻として夫并舅姑之事を訴ゑもの鞭三十虚説ヲ搆裁許ヲ願丶者ハ斬罪

149 一伯叔父兄姉之事ヲ訴ゑもの鞭十五訴ゑ事偽ニゑへハ平人より罪三等ヲ加へ可申事但被訴ゑ者ニ科人自身申出丶律と同様之事若伯叔父兄姉非道之事有之不得止事申出ゑハ可為沙汰事

七六一子孫父母之教ニ背丶もの

150 一子孫として父母之教ニ違ひ或ハ養育欠丶義有之ものハ鞭十五但父母之申出ニ寄刑ヲ加へゑ事 〔三二ウ〕

七七一訴訟之腰押いたし丶もの

151 一訴訟之腰押いたし丶もの或ハ人之為ニ訴状ヲ造リ人ヲ罪ゑ落さんと致丶もの本人と同罪之事

七八一強訴

152 一願難相成義ヲ大勢徒黨いたし支配頭之差圖ヲ不相用於強訴ハ其棟梁致丶もの鞭廿四加談致丶もの一等ヲ可減事其余一通ノ余黨者吟味之上用捨可有事

一〔運〕聞上

七九 隠津出之事

153 一隠津出致丶もの品物取押鞭十五相對いたし賦丶もの過料一人弐百文 〔三三オ〕

但二百俵以上之隠津出ハ家財家屋敷欠所所拂可致事

154 一米留有之節無手形米隠出丶ものハ鞭六駄賃付ハ過料壱貫弐百文

八〇一隠荷物

155 一旅船荷上致丶もの品物取押相對いたし丶間屋ハ鞭六家業取放

八一一隠商賣

156 一隠商賣いたし丶もの品物取押過料可差出セ事

但過料定別帳戸数方ニ条例有之 〔三三ウ〕

一雑犯

八二 博奕

157 一博奕いたし、もの鞭三其場之金銭没収可致事但宿
致、者可為同罪事尤其場ニ居合、者之外同類有
之共一ミ詮義ニ不及事
但軽キハ宝引よみかる ゑいたし、もの戸〆三十日

八三一御用事ヲ致頼合、もの
158 〔一〕御用事ヲ曲ケテ頼合いたし、者戸〆三十日頼、もの并
頼ヲ受、者同罪之事若既ニ施行ゆへハ頼ヲ受、ものハ
鞭六頼、ものハ其事親戚朋友之為ニゆへハ本罪二等ヲ
減自身之為ニゆへハ本罪之上江一等ヲ加へゆ事尤曲、〔三四オ〕
事重、得ハ人之罪ヲ軽重いたし、律を以刑ヲ加、事
為是賄賂ヲ取、へハ犯法之律ヲ以〔以下欠〕

八四一人之罪ヲ軽重いたし、もの
159 一依怙昃負ヲ以人之罪ヲ軽重致、もの其増減致、所
を以其分之罪ヲ加へ、事若或ハ全ク隠或ハ全ク偽、へハ
其本罪ヲ以刑ヲ加へゆ事

八五一失火
160 一失火いたし、もの戸〆廿日類焼有之、へハ三十日因て人
を焼死ゆへハ鞭十五一家之内誰ニ而も手過いたし、者江
刑ヲ加へゆ事若御宗廟并御城ゑ江類焼及、得ハ
徒一年半鞭三十 〔三四ウ〕
161 〔マヽ〕一諸役所并御蔵之内ニ於て失火いたし、もの鞭廿四

〔八六 欠〕〔162 欠〕

八七一御觸ニ背きゆもの
163 一御觸ニ背、ものハ事之軽キハ戸〆十五日重キハ戸〆三十
日」

八八一不可為義ヲいたしゆ者
164 一不可為義を致、もの事之軽キハ戸〆廿日重きハ鞭
三是ケ条之義元來重キ科ハ律ニ正敷ケ条有之、へ共
軽キ事ニ至リ事変萬端ケ条之難延、間〔ヒ〕有様之義
二等ニ分此ケ条ヲ以沙汰可致、事

八九一科人手向致、もの
165 一科人逃去捕手之者へ手向いたし、もの本罪之上ゑ
二等ヲ可加へ事尤人ニ疵付打傷ニ至、へハ斬罪 〔三五オ〕

料

九〇一科人出奔

166 一牢破并預ゆ内縄解き出奔いたし、もの本罪ニ弐等ヲ可加事

資

167 一預之者不覚ニ而取逃、もの預人并番人三十日之内ニ取、様ニ申付若捕兼、節ハ罪人之科ニ三等を減態と逃ゆへハ科人同罪

九一一科人ヲ隠ゆもの

168 一科人御僉義之ものヲ乍存隠置或ハ其支ヲ告知らせ逃、節者科人之罪ニ一等ヲ可減事

九二一私ニ舛秤ヲ造ゆ者

169 一私ニ舛秤ヲ造通用舛ヲ増減いたし奸曲ゆもの鞭六〔三五ウ〕

九三一御関處忍通候もの

170 一御関所忍通ゆもの鞭九山越いたし、もの鞭十二

九四一立帰之もの

171 一科有御沙汰之上追放と仰付、もの御構之地ニ立帰ゆへハ鞭三本のゝとく追放可致事

172 一悪事有之他国江出奔以多し其後立帰り忍居、もの本罪より一等を可加事但本罪軽〔く〕具ゆハ、御関所忍通、罪ニ一等ヲ可加事

173 一悪支無之出奔之後立帰、もの御関所外へ出不申ゆへハ過代夫役廿日

九五一馬札紛失〔三六オ〕

〔174 欠〕

175 一馬札紛失いたし、もの過料壱貫文

一犯〔奄〕姦

九六 姦淫

176 一姦淫之ものハ鞭九男女可為同罪事夫有之者ハ鞭三十

177 一強姦之ものハ徒壱年半鞭三十未成者ハ鞭三十

178 一幼女十二歳已下姦、もの強姦同様之事

179 一妻女ヲ許して姦ヲ致セ、もの本夫姦婦いつ連も同罪之事右何連も姦所ニ於て見届慥成證據有之夫或ハ親族ゟ申出ニ寄御沙汰可致事外ゟ訴ゆ類ハ御取上無之

九七一僧尼之犯姦

180 一僧尼犯姦之者ハ平人姦淫之罪ニ一等ヲ加へ還俗為致ヽ〔三六ウ〕
事犯姦〔ママ〕しゐものハ平人姦淫之罪ニ行ゐ事

九八 一下人家長之妻女ヲ姦ヽもの

181 一下人として妻女ヲ姦ヽもの斬罪妻ハ一等ヲ減可申事

九九 一相對死

182 一男女申合相果ヽもの子細無之ゐへハ死骸取捨若女ヲ
先キゑ殺し男存命ゑゐ得ハ下死〔ママ〕人男相果女存命ニ
候へハ及下手人ニ三日晒之上乞食手江相渡可申事

183 一男女共疵斗ニ而存命ニゐ得ハ是又三日肆し乞食手へ相
渡可申事

184 一主人下人と申合相果ヽもの下人相果主人存命ニゐ得ハ
下手人ニ不及乞食手江相渡主人相果下人存命ニ〔三七オ〕
候へハ獄門

一〇〇 一隠遊女

185 一御免場所之外隠遊女抱置渡世いたしゐものハ鞭三
右
〔三七ウ〕

本書は、弘前市立弘前図書館の目録には、

和律　　GK三二二・五―二三九
写　一冊　半紙
寛政律といわれるもの

とある（『岩見文庫郷土資料総目録』昭和五七年一二月、八七頁）。

本書の体裁は、縦二四・六センチ、横一七・一センチで、半紙を二つ折にして袋綴じし、本文三七丁（目録を含めて）に、表紙も同じ半紙を袋綴じした仮表紙で、右端を上下二カ所でこより綴じする。表紙には、左端に「和律　全」と墨書している。表紙の右肩にはられたラベルには「岩見文庫／59／44（郷）」とあり、この上部にかかって現在の配架ラベル「GK／322・5／239」が貼られている。目録第一丁表の右下辺に「岩見文庫／G　4010／弘前図書館」の印が捺されている。裏表紙はなく、末尾の三十七丁裏は、本文の最後に「右」と記すのみで、筆写の年次を示す直接のてがかりはない。

目次は、他本の上段に横に表題をならべ、ついで下段にならべていく手法と異なり、表題の配列順を各行の上・下につづけていく手法である。その結果、三七から四一までの乱れが生じたほか、二三・四九・五四・五六・六二・八六・九八の脱落が

みられる。

本文は、片面十一行、一行二十二字前後で、朱書・書入れ・貼紙はない。本文中のおもな異同にふれておくと、条文を欠くのが47・107・113・119・142・174条である。項目名を欠くのが、四一・四九・五六で、項目名・条文ともに欠くのは八六（162条）である。目録と照合すると、このうち四九・五六は目録にもみえないが、他は目録と対応しないので、目録も本文との検討なしに母本から引写しされたものである。

冒頭の目録については、組版の都合で原本通りに印刷できなかったため、元の配列関係を示しておく。

目録	一丁表 上段	一丁表 下段	一丁裏 上段	一丁裏 下段	二丁表 上段	二丁表 下段	二丁裏 上段	二丁裏 下段	三丁表 上段	三丁表 下段
一	一〇	二	一七	一八	三七	四〇	六三	六四	八五	八七
三	一二	四	一九	（二行）	三九	四二	六五	六六	八八	八九
五	一三	六	二〇	二一	四一	（二行）	六七	六八	九〇	九一
七	一五	（二行）	二二	二四	四三	四四	六九	七〇	九二	九三
			二五	二六	四五	四六	七一	七二	九四	九五
			二七	二八	四七	四八	七三	七四	九六	九七
			二九	三〇	五〇	五一	七五	七六	九九	一〇〇
			三一	三二	五二	五三	七七	七八		
			三三	三四	五五	五七	七九	八〇		
			三五	三六	五八	五九	八一	八二		
			（二行）	三八	六〇	六一	八三	八四		

付9 『御用格』二十二（国立史料館所蔵）

凡例

一 国立史料館所蔵本（陸奥国弘前津軽家文書 一五九）を用いた。

一 本書の後半は虫損のため閲覧禁止となっているので、閲覧可能部分のみを翻刻した。

一 字体、字配りはできる限り、原本に従った。異体字・変体仮名については必ずしも原本に従ってはいない。

一 仮項目番号一、二、三、……および各件番号1、2、3……を付した。ただし、168と201の間は閲覧不能のため、件数不明につき、便宜上、番号を空けた。

一 各項目、各件の前をそれぞれ一行空けた。

一 原本の丁数および表裏を各終行末に〔 〕で示した。

一 各丁片面八行で記されており、念のため空白行数を〔 〕で示した。

一 他に適宜書き加えた箇所も〔 〕で示した。

一 読点を適宜に施した。

従 文政八年
至 弘化四年
御 用 格 二十二

(縦 23.4cm 横 17.2cm)

巻ノ二十二

凶事

出座定「一」〔朱〕 慎「二」〔朱〕 遠慮御呵押込「二十」〔朱〕

町在之儀ニ付御家中遠慮「二十七」〔朱〕

町役浦〻在役凡而町在之者御呵「二十八」〔朱〕

附黒石家中浪人共

〔二行分空白〕 〔一オ〕

〔裏八行分空白〕 〔一ウ〕

一　出産定

1　〔一八三〇〕天保元年十月十九日

一御家老宅ニ而七時御用有之、月番御用人出席可致処、御用有之ゟ付、當番御用人相勤ゟ事、

〔三行分空白〕〔裏八行分空白〕

〔朱〕「一」

〔一オ〕

二　慎

2　〔一八二五〕文政八年七月十一日

一中ノ口人使警固黒滝藤次郎儀當番之処、御小納戸役江之返事、右返事持参之小使清野九八郎与申者江申聞ゟ処、奥江罷通ゟ旨、右者坊主方迄を奥与申唱ゟ旨申出ゟ得共、不届ニ付慎申付ゟ

〔朱〕「二」

但同日諸手足軽清野九八郎儀初番ニ而中ノ口小使相勤、坊主方迄罷通ゟ通、様申聞ゟ儀を、不案内ニ而奥江罷通ゟ段申出、不届ニ付慎申付ゟ、但両人共五日目ニ而御免、

〔二ウ〕

〔三オ〕

3　文政八年九月十日

一津軽繁吉伯父源五儀常ゞ不行状、其上大道寺次郎市於稽古所不限朝夕酒呑合、右ゝ処与り若手之向ゞ迄不取締之段相聞得、不届ニ付慎被　仰付ゟ、但小野男也呼上、於御用人宅申渡ゟニ付、次郎市門弟取扱小山内外衛義遠慮被　仰付ゟ、

〔三ウ〕

4　〔一八二七〕文政十年十一月十六日

〔朱〕「三」一重田傳十郎儀於笠原八郎兵衛殿宅被申渡ゟ御用ニ付、重役□〔虫損〕□役相詰ゝ得と母遅刻いゝし、外御用向御間欠ニ相成、先頃厳敷御家老中与り御演説茂有之処、致忘却、勤向緩怠慎被　仰付ゟ、但三十日目ニ而　御免、

〔四オ〕

5 〔一八二八〕文政十一年正月十日

一坊主頭申出ゟ、時計番近藤歳徳
義當番之節申合、致退下、御用
支有之、不届ニ付慎申付ゝ旨達、
但廿日目ニ而　御免、

〔四ウ〕

6 文政十一年五月廿六日

一以下収配成田小兵衛儀親外弥
先年不埒有之、御刑法被行ゟ上、
小兵衛江預置ゟ処、今以悪事
而已取巧、吟味之処、右躰之儀〔虫損〕
〔朱〕「四」
得と母、町方之者之名目を以御雇〔虫損〕

〔五オ〕

小人ニ相成罷登ゟ旨、尤右之節
小兵衛在勤跡之旨申出ゟ得共、
在勤之節、親類共江見継相頼ゟ
欲、何連ニ茂品能手當茂可致処、
無其儀御取扱相成ゟ段、不届ニ付
慎被　仰付ゟ、
但五十日目ニ而　御免、

〔五ウ〕

7 文政十一年五月廿六日

一小山内忠次郎二男長吉儀、桶屋町
長左衛門二男福次郎御雇小人ニ相成、
取支度中、病氣ニ付、忠次郎忰
長司ニ咄合之処、弟長吉罷登度
旨ニ付、右名目借受罷有ゟ由之処、
成田外弥頼合ニ寄、長吉儀右名
目相譲ゟ旨、悉皆自分限〔虫損〕
〔朱〕「五」
略ゝ相違無之、甚不埒之致〔虫損〕方ニ付
長吉儀慎被　仰付ゟ、
但三十日目ニ而　御免

〔六オ〕

一右ニ付、小兵衛親外弥并町方之者
御締方委細有之、

8 〔一八一九〕文政十二年四月十一日

一齋藤掃部儀居宅焼失茂有之、
急火与乍申、御預御道具半焼失
之段申出、変事不得止事条、
不行届之取扱、其上火元申出、

〔六ウ〕

不束之事共重疊不埒ニ付、慎
被　仰付ゟ、
但廿日目ニ而　御免、

9　同年五月廿日
一新番所當番御持筒足輕相馬
「六」〔朱〕　礒八儀、在医倉谷俊隆忰□〔虫損〕
義心得達ニ而西御門与り武者屯
迄相通ゟニ付、詮議之処、壱人ニ而
代り合之節、御番所明きニ相成、旨
申出、得共、御場所柄通し間敷
者相通ゟ儀、不届ニ付、慎申付ゟ、
但十日目ニ而　御免、
同日西御門當番之者共両人御締
方之儀、委細、御呵之部ニ相記之、

〔七オ〕

〔七ウ〕

10　文政十二年五月十六日
一山本三郎左衞門義、報恩寺木
部屋出火之節、火消番之処、駈付
罷越、同寺門前ニ而怪我いゝし、
火元江不罷越、組警固鎮火見
届、其侭御用番江罷出、鎮火ニ付
火元引取ゟ段相断、病氣ニ而
火元江不罷越ゟハ、、其子細「可相」〔虫損〕
「七」〔朱〕
断之処、甚不束之勤方「ニ付」〔虫損〕
慎被　仰付ゟ、
但廿日目ニ而　御免、

〔八オ〕

11　文政十二年十二月廿二日
一工藤惣左衞門儀、先頃在御用ニ而
罷下ゟ節、途中山駕籠相用得、
病氣与乍申、御定茂有之処、
願出茂無之、不心得之至、不届ニ付、
慎被　仰付ゟ、
但翌正月六日　御免、

〔八ウ〕

12　同年五月三日
一桜庭太門義、
御着城之節、千歳山過酒いゝし、
御供先を茂不顧、古役ニも有之処、

心得違之勤方、不届ニ付、慎被
仰付ゟ、　但廿日目ニ而　御免[虫損]、
「八」[朱]　〔九オ〕

13
文政十二年五月三日
一山田定藏・石火矢甚次郎儀、
御着城之節、於千歳山過酒以ゝし、
御供頭之差圖を不相用、其上
御行列江茂差添、不届至極ニ付、
慎被　仰付ゟ、
但三十日目ニ而　御免、

14
〔一八三〇〕
天保元年十二月十二日
一長柄之者岩崎孫左衛門義、娘もよ
荒木關外太郎方奉公中、同人
祖母江毒[虫損]薬飲せゟ趣相聞得、
吟味中揚屋入之処、大病ニ付快氣
迄御預被　仰付ゟ、然ニ八月十日
自分當番之夜もよ儀、病屈与
相見得、家出以多しゟ旨申出有之、
〔九ウ〕

尤歩行自由ニ相成ゟハゝ、快氣[虫損]
之旨早速可申出処、旁扱方[虫損]
緩せ之段、不埒ニ付、慎申付ゟ、
但同廿九日免許、尤日数廿日ニ而
御免之部ニゟ得共、年頭ニ相拘ゟ間、
十八日目ニ而ハ　御免被　仰付ゟ、
「九」[朱]　〔一〇オ〕

15
天保元年五月六日
一毛内藤左衛門忰貞作儀、常々
不言行、其上先達而御詮議之筋
相違之申出有之、不届至極ニ付、
慎被　仰付ゟ、
〔一〇ウ〕

16
〔一八三一〕
同二年六月十七日
一御手廻與力外崎庄司儀、親
謙太郎儀増館組樽沢村住居
之上揉合江腰押いゝしゟ趣、詮議
之処、右躰之儀無之旨、尤在住
之儀願済之旨申出ゟ得共、弟[虫損]
「十」[朱]　〔一一オ〕

別帳江書上無之、其上右〔出損〕
前後相違を申出、御扱重ニ相成、
不届ニ付慎被　仰付ゟ、尤親謙太郎
義者在方住居差添之筋茂
有之ゟ間、樽沢村与り引取、其旨
申出、様申遣之、

17
天保二年正月十七日
一工藤源左衛門義、支配所詰合之処、〔一一ウ〕
及失火、町奉行所焼失之段、
變事不得止事与申条、不行届
之至、不届ニ付、慎被　仰付ゟ、
但三十日目ニ而　御免、

18
同年五月十二日
一御留守居支配須郷市弥母常ゝ
大酒不行状之旨、詮議之処、委細
大酒不行状之旨、詮議之処、委細
〔朱〕「十二」申出ゟ得共、家事不取締之趣
無相違相聞得、不埒ニ付、市弥儀
若年之儀ニ茂有之ゟ間、格段之以〔一二オ〕

御沙汰、慎被　仰付ゟ、
但廿日目ニ而　御免、

19
天保二年六月六日
一大組警固工藤利八郎出奔之子
民藏義、一昨年御法養ニ付大赦
被行ゟ節、出窄之上、利八郎江〔一二ウ〕
御預之処、萱町住居幸助方江内ゝ
借宅罷在、不埒有之、捕手差向ゟ処
ニ而、出奔ニ至、儀、必竟利八郎見継
方緩怠、其上御預之もの申立茂
無之別宅致せ置ゟ処ゟ、御取扱ニ
相成、不心得之段、不届ニ付、急度可被
仰付ゟ得共、借宅之始末不得
〔朱〕「十二」止事筋ニも相聞得ゟ間、慎被　仰付ゟ、
但廿日目ニ而　御免、〔一三オ〕

20
天保二年七月十二日
一以下支配三浦元吉儀、親元市
御代官加勢勤中、御用銭取扱不埒

有之旨、元市死後相顕ゟ儀申出
有之ゟ得共、片口同様之儀ニ付、格段
御沙汰を以、右銭不及上納、尤親
元市不埒之処与り御扱相成、不届
ゟ付、慎被　仰付ゟ、
但三十日目ニ而　御免、

〔一三ウ〕

21　同年十月廿二日
一御馬廻與力棟方源之丞大組与力
小野忠左衛門儀、小泊大筒臺場ニ而
打方ヒ　仰付、節、　御尋之度ゝ
相違を申出、御要害之御場所詰合
〔朱〕「十三」不心懸之至、不埒ニ付、慎被　仰付ゟ、
但廿日目ニ而　御免、

〔一四オ〕

22　天保二年十月廿四日
一御持筒足軽吉沢七郎治儀、御櫓
下當番之処、居眠りいゝし合手木
不致、不行届ニ付、慎申付、旨、頭方
与り申出、承届ゟ、

23　同年九月三日
一成田内藏之丞儀、於道中御預
御用状致紛失、御用物等閑之
取扱、不届ニ付、慎被　仰付ゟ、
但三十日目ニ而　御免、

〔一四ウ〕

24　同年十二月廿三日
一佐ゝ木與負儀、俗縁之弟此度
退院之上隠居被　仰付ゟ袋宮寺
覚真儀、僧侶不似合之事共
〔朱〕「十四」多有之処、異見を茂不加、却而
不筋之助力ニ預、漸日用取續ゟ段、
必竟家事不取締之処与り及
極究、御奉公筋ニ茂相拘り可申
義ニ付、慎被　仰付ゟ、
但三十日目ニ而　御免、

〔一五オ〕

25　〔一八三三〕天保四年五月七日
一松井健左衛門義唐之土取組
申立ニ而旧冬秋田久保田表江

〔一五ウ〕

往還廿日之御暇願之上罷越、処、
他邦往來及延着、御締合ニ茂
相拘りゟニ付、慎申付、旨、町奉行江
申遣之、
但廿日目ニ而　御免、

26　同年十一月晦日
一町奉行申出ゟ、町同心葛西伴之丞
「十五」〔朱〕義、揚屋當番之節、木造村慶助　〔一六オ〕
取逃、慎申付置ゟ処、慶助頃日
油川邊徘徊之旨承り、召捕
方ニ罷越度願出、慎
御免之上、罷越召捕ゟニ付、直様
已前之通慎申付置ゟ、然者先頃
揚屋當番之節右慶助取逃ゟ
義深く心を入、手寄を求、召捕
方ニ相成、奇特之者ニ付、慎　〔一六ウ〕
御免之上、町同心是迄之通被
仰付度儀申出、等閑之いゝし方
不届ニ付、急度可被仰付ゟ得共、

自分手を以召捕ゟニ付、以
御憐愍、慎被　仰付、旨申遣之、

27　天保六年八月廿四日
一野上修理申出ゟ、諸手足軽竹中
「十六」〔朱〕幾次郎儀御飛脚下之処、豊嶋駅　〔一七オ〕
ニ而御目付与り之御用状置忘ゟニ付、
立帰り詮議仕、得共、相見得不申
ゟ付、右御用状詮議方駅場役人江
頼合、罷下ゟ処、ゟ今相届不申旨
申出ゟ間、昨晩慎申付置、旨、承届ゟ、
但十月廿五日、右幾次郎儀右之儀
ゟ付、改而三十日慎被　仰付ゟ、

28　〔一八三八〕天保九年閏四月廿二日　〔一七ウ〕
一諸手足軽三浦與助儀、上持御用状
取落ゟ儀申出、爰許着之処ニ而
立戻り、詮議之上見當りゟニ付
持参之旨申出ゟ得共、御預御用状
等閑ニ相心得ゟ儀、不埒ゟ得共、

立戻り詮議之上見當りゆニ付、
此度者格段之御沙汰を以、慎
〔朱〕「十七」申付ゆ、　但十五日目ニ而　御免、〔一八オ〕
〔裏八行分空白〕〔一八ウ〕
〔表八行分空白〕〔一九オ〕
〔朱〕「十八」
〔裏八行分空白〕〔一九ウ〕
〔表八行分空白〕〔二〇オ〕
〔朱〕「十九」
〔裏八行分空白〕〔二〇ウ〕

三　遠慮御呵　押込

29　〔一八二八〕文政十一年五月廿六日

一御留守居支配中村亀吉儀方
成田小兵衛親外弥を御雇小人
差出、江戸表江差登せゆ旨、吟味
之処、秋田屋常次郎名目借受
ゆ得共、常次郎懸念致、間、延引
致ゆ処、右始末弥聞及、右之〔二一オ〕
〔朱〕「廿」名目を以、掃除頭頼合、罷登ゆ
義ニ而、自分儀者一向綺不申旨
申出ゆ得と母、發端、出入之者申ニ任せ、
常次郎与り名目借受ゆ段、
不届ニ付、遠慮被　仰付ゆ、
但十日目ニ而　御免、〔二一ウ〕

30　〔一八二九〕文政十二年十二月六日

一三組頭釼術見分之節、白取
貫一儀、門弟切組帳御留守居組頭
江差出不申、見分相止ゆ間、衆議
之処、前ミ者両組頭江斗差出ゝ由、
然処一昨年改而御留守居組頭江も
差出ゝ様、三組頭ニ而申付ゝ処、其後
両度と母本帳持参不致、下書
斗差出ゆ旨、緩怠之至、不届ニ付、

〔朱〕「廿一」遠慮被　仰付ゟ、　〔二二オ〕

31

〔一八三〇〕天保元年四月十六日

一一戸平八郎儀、先勤之節、坊主方於請拂部屋、酒飲合、不埒之儀有之、詮議之處、右躰之儀無之旨申出ゟ得と母、酔倒怪我致ゟ者茂有之旨、然者當番之者御城中禁酒之御場所をも不憚大酒之上前後忘却之仕振不埒ニ付、慎被　仰付、其外坊主共数人御呵被　仰付ゟ、　〔二二ウ〕

32

〔一八三一〕天保二年正月十七日

一後藤多宮儀、高岡村之もの共山所揉合一件ニ付、葛西久之丞申出江基、委細申出ゟ得共、先達而御沙汰之上山所御仕分ニ被　仰付、を、〔朱〕「廿二」支配之者申出迚、軽求ニ心得、不束之儀共不存付、麁忽之申出、御扱重ニ相成、不届ニ付、遠慮被　仰付ゟ、但十日目ニ而　御免、　〔二三オ〕

33

天保二年四月廿九日

一昨日　御参詣　御帰之節、遠見相勤ゟ長柄之者北川善吉儀、遠見注進不埒之申出、不届ニ付、押込申付ゟ、　但十日目ニ而　御免、　〔二三ウ〕

34

〔一八三二〕同三年十月十五日

一己下支配成田久我吉儀、岩木川出水之節流木留揚隠置、趣、吟味之処、委細申出ゟ得共、常〻家内共江申付方緩せ之処ゟ御扱相違、段、不届ニ付、御奉公遠慮被　仰付ゟ、　〔二四オ〕

〔朱〕「廿三」　但十日目ニ而　御免、

35

〔一八三八〕天保九年三月十九日

一海老名彦藏・桜庭兵右衛門申出ゟ、

工藤庄太郎・羽賀和助・野呂己之助
義、御飛脚下之処、延着ニ相成、得共、
御内書附之儀ニ付、呵不申付旨達、

36 同年閏四月廿二日 〔二四ウ〕
一大組足軽佐々木藤藏儀、諸手
足軽三浦與助御預御用状取落
ゐ之儀、組合御飛脚ニ而参ゐ処、
萬端不心付諸慮ゑも不致儀、
不埒ニ付、其方共ニ而呵置、様可申
付旨、物頭江申遣之、

37 同年十一月十日 〔二五オ〕
一三奉行申出ゐ、町同心成田重兵衛
義、揚屋當番之折、同所入之もの
〔朱〕「廿四」七人取逃、必竟見継緩せ之処ゑ
右躰有之不埒ニゐ得共、右之内既
六人迄召捕ゐ儀ニ付、此度者格段
御沙汰を以、御用捨可被　仰付哉之儀、
沙汰之通、

38 〔一八一九〕文政十二年十月十六日 〔二五ウ〕
一武藤多宮義、常々行状不宜、随意
増長致、役儀不似合之事共有之、其上
養家并親族不和合之旨相聞得、
不届ニ付、隠居被　仰付、実家棟方晴吉江
御返之上、他出差留被　仰付、以
御憐愍、多宮養父駒五郎実子
嵩三郎へ、駒五郎跡式無相違高
百石被下置、御留守居組被　仰付、、

39 〔一八三八〕天保九年閏正月三日 〔二六オ〕
一木村八左衛門義、三厩詰之処、御固所
〔朱〕「廿五」不締之処ゑ御人数一統御締合不宜、
殊ニ御太切御場所柄をも不弁、司役
不似合不言行卑劣之致方ゑ有之、
御役儀致忘却、不届至極ニ付、急度
可被　仰付、得共、格段之以
御憐愍、隠居被　仰付、家督御留守居組
被　仰付、間、身寄之者養子申立ゐ様被
仰付、、

40 同日 〔二六ウ〕

〔表八行分空白〕

「〔朱〕十六」 〔二七オ〕

一笹要人義、右同様検使被　仰付、處、
御固所不締之儀有之、ハ、、可申出処、無其儀、
却而詰合中言行不宜、卑劣之事共
有之、御人数一統之御締合ニも相拘、殊ニ御太切
御場所柄をも不弁、御役儀致忘却、不届
至極ニ〔虫損〕付、急度可被　仰付、得共、格段之以
御憐愍、隠居被　仰付、家督悴健作へ被下置、
御留守居組被　仰付、、　但前書之外両人有之、〔二七ウ〕

41

〔一八二六〕文政九年四月八日

一御持筒足軽成田善次郎義、病死ニ付、
同人子直吉儀、格段之以御沙汰、俵子
廿俵弐人扶持被下置、御城附足軽新規
召抱申付、、
但、善次郎儀、先頃病屈ニ而得疵ゟ處、
弥差重病死之旨申出、、
〔一行分空白〕 〔二八オ〕

〔裏八行分空白〕 〔二八ウ〕

四 町在之儀ニ付御家中遠慮

〔七行分空白〕

「〔朱〕廿七」 〔二九オ〕

〔裏八行分空白〕 〔二九ウ〕

五 町役浦〻在所凡而町在之
者御呵　附黒石家中浪人共

42

〔一八二五〕文政八年四月三日

一大工町住居相沢屋文助手代
豊吉儀、〔傳〕轉奕打合之儀ニ付、鞭刑
被行ゟ儀申付、処、積氣差發
大病ニ付、追而全快之処ニ而御刑
法ヶ仰付度旨、町奉行ゟ申出ゟ間、〔虫損〕其方
「〔朱〕廿八」 〔虫損〕共ニ而病氣□〻吟味之上〔虫損〕快氣
之処ニ而、早速其段申出、様申遣之、 〔三〇オ〕

43

〔一八二八〕文政十一年六月廿七日

一町奉行申出ゟ、大坂屋三郎治儀
五軒組合ニ付戸〆被　仰付、而者、
御用支ニ相成、間、店開置、御菓子
御用相勤ゟ様被　仰付度義、
伺之通、

〔三〇ウ〕

44 同年九月十九日
一三奉行申出ゟ、境關村與八女房
さな義、先年不届之儀有之、御仕
置被　仰付、処、去ル子年
御轉任　御兼任御祝儀之御赦
御免被　仰付ゟ間、行衛身寄相糺、
若當人死失いゝし、身寄茂無之者、
右村役人江　御免之段〔虫損〕可仰
「〔朱〕廿九」
渡、尤右申渡相済ゟハ、、其段〔虫損〕
可申上旨共、町御奉行筒井伊賀〔虫損〕守殿
与り御達有之、御代官ニ而境関村
庄屋江申渡相済、別紙之通御請
書差出為御登被　仰付ゟ、尤御請

〔三一オ〕

之書〔虫損〕ハ茂不束ニ付、右之趣
御留守居ニ而差含、御届ニ相成、様、
委細沙汰之通、

〔三一ウ〕

45 文政十一年五月廿六日
一以下支配成田小兵衛親外弥儀、
桶屋長左衛門名目を借受、御屋
小人ニ相成、江戸表江罷越、儀ニ付、
長左衛門戸〆被　仰付、義ニ付、委細事、

46 〔一八二九〕同十二年五月廿一日
一木造村医業春立忰倉谷〔ガ〕〔文意〕
同村治兵衛二男長次郎去ル六〔虫損〕〔虫損〕西
「〔朱〕卅」
御郭罷通ゟ儀ニ付召捕〔虫損〕〔詮議之処〕
玄意儀〔虫損〕〔イ〕春昌方江居弟子
相成居ゟ処、長次郎追〻罷越道
筋不案内ニ而罷通、恐入ゟ旨、然者
御場所柄不相弁罷通ゟ儀者、甚
不埒ゟ得共不案内無拠筋ニゟ間、日数
十日充慎被　仰付ゟ、

〔三二オ〕

47 〔一八三〇〕天保元年五月十日

一町奉行申出ゟ、去ル十七日富田御屋敷江　御出被　仰出、

御帰城相済不申内、和徳町甲刄屋義兵衛脅戸之小屋焼失仕、慎申付ゟ儀、御達申上ゟ処、御帰城相済不申内、失火之節、慎日数相増申付ゟ義有之哉之旨、御尋被　仰付、詮議之処、別ニ日数〔出損〕相増〔朱〕「卅一」申付ゟ先例無之旨申出達、

〔三三一ウ〕

〔三三オ〕

48 天保元年五月十二日

一御出之節出火有之ゟ得者、火元御定与り慎日数相増ゟ儀、三奉行評議被　仰付ゟ処、是迄者一定致ゟ儀無之ニ付、已來左之通、

一御出之節、

御通筋出火有之ゟ得者、是迄之御定より十日増、慎戸〆之事、

但、類焼有之、日数相増ゟ而茂、

〔三三ウ〕

右ニ不抱、十日増之事、

一御帰之節、同断、

但、御供引取後之出火者、是迄之御定与り七日増、慎戸〆之事、

一御通筋裏町五町四方出火者是迄之御定ゟ七日増、慎戸〆之事、〔出損〕〔朱〕「卅一」

但、御供引取後之出火者、是迄之御定之通之事、

右之通、此度改而被　仰付、間、右之心得ニ而、已來取扱、様被　仰付ゟ、

〔三四オ〕

49 天保元年五月六日

一茂森町弁藏并新寺町弥三郎娘両人不言行ニ付、為懲、両濱遊女屋江ヒ下置ゟ儀、委細三奉行沙汰之事、

但、當年九月七日大赦ニ而、

御免被　仰付ゟ、

〔三四ウ〕

50 〔一八三一〕同二年十月十四日

一公義御普請役、青森通行之節、
同所名主病氣ニ而、溪目付江断
落致ゟニ付、御目録於江戸表ヒ下
置ゟ、右ニ付町年寄両人廿[日之][虫損]
「卅三」[朱]
戸ノ被　仰付ゟ、尤委細浦ミ被
仰出之部江相記之、　〔三五オ〕

51

天保四年七月廿五日[一八三三]
一町奉行申出ゟ、本町五丁目柏屋
惣助義、物置小屋焼失ニ付、慎
申付置ゟ、尤右様失火是迄日数
十日ニ而差許來ゟ得共、御中陰中
失火ニ付、相定ゟ日数ゟ七日相増、
明日ニ而十七日ニ相成ゟ間、明日慎免
許可申付旨、申出之通、　〔三五ウ〕

52

同九年八月十一日[一八三八]
一在町浦ミ之者共、是迄失火ニ而
類焼無之ゟ得共、村預入寺ゟニ而
慎被　仰付居ゟ得共、失火ニ而自分
宅斗焼失之節者、已後村預入寺
「三四」[朱]ニ而慎申付ニ不及ノ様、被　仰付ゟ、尚又
火之元ゟ之儀者、格別念入御締　〔三六オ〕
合相立ノ様ヒ　仰付ゟ、尤類焼ゟ有之
節者、是迄之通急度慎申付
ゟ之様、被　仰付旨、郡奉行・町奉行・
九浦町奉行[江][虫損]申遣之、　〔三六ウ〕
〔三行分空白〕

〔表八行分空白〕

「卅五」[朱]　〔三七オ〕

〔裏八行分空白〕

巻之二十二　〔三七ウ〕

凶事

伺　遠慮

一御印物印判「一」[朱]　二御出之節間違「二」[朱]
三御家老御用人并重役江無禮「七」[朱]
四御獻上日之丸　御進物「八」[朱]

五諸御禮披露違　着服違「九」〔朱〕
六御名代御召物「十一」〔朱〕　七御臺所廻り「十二」〔朱〕
八諸斷　諸通用　御請「十三」〔朱〕
九刀鞘走り　慮外「十五」〔朱〕
十ノ一認違　遲滯　不吟味　間違　不心得
心得違　御書物　遲刻「十六」〔朱〕
十ノ二子供并九而家内又者家來
之儀ニ付　門弟并弟子之儀ニ付「廿六」〔朱〕
十ノ三高覧并見分之節無調法　武藝
之儀ニ付心得違「卅一」〔朱〕
十一誓詞御飛脚登「卅五」〔朱〕
十二御藏御鍵　渋順違　目論違「卅六」〔朱〕
十三田方山方屋鋪夜廻り　養子「卅七」〔朱〕
十四諸渡物　押物　御用達「卅八」〔朱〕
十五組支配「卅九」〔朱〕
十六変鐘　失物　咎人　盜賊　御預
遠慮　欠所　評定所　出奔「四十二」〔朱〕
〔一行分空白〕
〔裏八行分空白〕

〔三八オ〕
〔三八ウ〕
〔三九オ〕

53

壱

文政十一〔八二八〕年十月五日
一米橋〔八木〕宇源太申出ゟ、去亥年
板柳御藏立合勤中、御扶持方
御印紙焼失、恐入ゟニ付、遠慮
伺之通、尤御定法之通、過料銀
壱枚上納被　仰付ゟ旨申遣之、
但三日目ニ而　御免、〔朱〕
「一」〔日取紙〕「右下」
〔裏八行分空白〕

〔四〇オ〕
〔四〇ウ〕

54

弐

文政十二〔八二九〕年四月十四日
一都谷森源吾申出ゟ、昨日於
御供先無調法之儀有之、遠慮
伺之通、
但、五日目ニ而　御免、

55 同十四日

〔朱〕「二」一御中小性頭三浦佐七申出ゟ、御中小性
蝦名十兵衛儀、御供見習被　仰付
無御座内、御供ニ差出ゟ儀、當番
御中小性与り申遣ゟ処、含違承届、
恐入、遠慮伺申出之、以　御用捨
不及遠慮旨申遣之、

〔四一オ〕

56 同日

一御中小性笹村重吉・黒滝幸次郎
申出ゟ、右通用間違差出ゟニ付、
遠慮伺申出之、以御用捨不及
旨申遣之、

〔四一ウ〕

57 〔一八三〇〕天保元年七月廿三日

一高岡祭司下役伊藤茂三郎儀、
高岡江
御出之節、於　御廟所居睡仕、
御目障ニ相成、恐入、遠慮伺之儀、
〔朱〕「三」格段之以御沙汰不及遠慮旨、

〔四二オ〕

申遣之、
但、右ニ付、祭司役斎藤八郎左衛門
与りも申出、同様被　仰付ゟ、

58 〔一八三一〕天保三年正月廿七日

一藤田忠之進儀、
御通行之節、召仕之もの門戸
閉ニ罷出ゟ処、
御通行江差懸、御行列内与り
聲懸ゟニ付、門戸其侭差置、
平伏仕居ゟ旨申出、恐入ゟニ付、
遠慮伺之通、
但三日目ニ而　御免、

〔四二ウ〕

59 同廿九日

一白取数馬儀、
御宮御社参之節、張番固之儀
〔朱〕「四」心得違以多し、恐入ゟニ付、遠慮
伺之通被　仰付ゟ、
但、七日目ニ而　御免、

〔四三オ〕

〔六行分空白〕〔四三ウ〕

〔表八行分空白〕〔四四オ〕

〔朱「五」〕

〔裏八行分空白〕〔四四ウ〕

〔表八行分空白〕〔四五オ〕

〔朱「六」〕

〔裏八行分空白〕〔四五ウ〕

三

60 〔一八三〇〕天保元年六月七日

一堀五郎左衛門・渡邊將監申出ゟ、
與力太田令次郎・篠村何五郎
内東御門當番之処、多膳殿出仕
之節、二之丸於御馬場御馬事ニ付、
下乗之儀申上、落ニ相成、恐入、
遠慮伺申出ゟ間、伺之通申付、旨

〔朱「七」〕〔四六オ〕

達、但、翌日御免、

〔七行分空白〕〔四六ウ〕

四

〔七行分空白〕〔四七オ〕

〔朱「八」〕

〔裏八行分空白〕〔四七ウ〕

五

61 〔一八二六〕文政九年正月十五日

一大道寺次郎市儀、今日披露違
恐入、遠慮伺申出、以御用捨
不及遠慮旨申遣之、
但、御祝中ニ付、格段以御沙汰、右之通
被仰付ゟ、

62 〔一八二九〕同十二年九月十日

「九」(朱)一河合又市忰萬喜太・小野常徳
義、昨日御礼之節無調法之儀
御座ゟ而、恐入、遠慮伺之儀、
不及其義旨申遣之、

〔五行分空白〕

〔四八オ〕

〔四八ウ〕

「十」(朱)

〔表八行分空白〕

〔四九オ〕

〔裏八行分空白〕

〔四九ウ〕

六

「十一」(朱)

〔七行分空白〕

〔五〇オ〕

〔裏八行分空白〕

〔五〇ウ〕

七

「十二」(朱)

〔七行分空白〕

〔五一オ〕

〔裏八行分空白〕

〔五一ウ〕

八

63 文政九年(一八二六)七月五日
一奈良岡十之進儀、一昨日伺御機
嫌登
城之儀同席江通用違恐入、遠
慮伺之通、　但、十日目ニ而　御免、

64 同十二年(一八二九)正月廿七日
「十三」(朱)一御目付對馬刑部儀、大目付名前
ニ而御廊下詰江差出ゟ御觸通
用落、遠慮伺之通、
但、三日目ニ而　御免、

〔五一オ〕

〔五行分空白〕

〔五一ウ〕

〔表八行分空白〕

「十四」〔朱〕

〔五三オ〕

〔裏八行分空白〕

〔五三ウ〕

九

〔七行分空白〕

「十五」〔朱〕

〔五四オ〕

〔裏八行分空白〕

〔五四ウ〕

十之壱

65 文政八年七月五日〔一八二五〕

一山形宇兵衛義、今日　御城詰之処、医者御用所江罷通ゆゑニ付、新長屋御医者与存罷有ゆゑ処、町医高城正意ニ而氣分不宜者之由恐入、遠慮伺申出、

「十六」〔朱〕不及差出旨書付相返、

〔五五オ〕

66 同七日

一右ニ付、師匠三上道淳忰道因与り茂遠慮伺委細申出、書付御返被　仰付ゆゑ、

〔五五ウ〕

67 文政八年七月十日

一御中小性馬場十右衛門・木村末吉義、去ル六日當番之節、奥江罷通りゆゑもの御家具之者与見違相通し、恐入、遠慮伺之通、但三日目ニ而　御免、

68 同九年正月十六日〔一八二六〕

一成田助次郎儀、昨日三日市太夫次郎名代沢山沖次郎進物取扱無調法有之、恐入、遠慮伺之通、但五日目ニ而　御免、

「十七」〔朱〕

〔五六オ〕

69 文政十年四月十一日〔一八二七〕

一豊嶋幾左衛門・澁谷忠吉郎・
原田理兵衛申出ゟ、大納戸方江
御預之袍衣入置ゟ御長持江蒔
喰破入、御太切之御品痛損之上、
染付、恐入、遠慮伺之儀、以御用
捨不及遠慮旨申遣之、

70 同年九月二日 〔五六ウ〕

一山本三郎左衛門義、
八幡宮御祭礼御先乗之処、
於途中腰痛強薬用仕ゟ内、
御行列御支ニ相成、恐入、遠慮伺、
以御用捨不及遠慮旨申遣之、

71 〔一八二八〕同十一年正月十日

一御飛脚番山崎喜平司・介添
〔朱〕「十八」葛西鉄三郎儀、旧臘御用状認
違御座ゟ而、恐入、遠慮伺申出之、
御規式中ニ付、以御用捨不及
遠慮旨申付之、 〔五七オ〕

72 文政十一年十一月廿六日

一工藤傳兵衛・釜蒔伊太郎・成田
万次郎儀、大奥御締合之儀
ゟ付、恐入、遠慮伺之通、
但、十日目ニ而 御免、 〔五七ウ〕

73 同年七月廿日

一作事奉行長谷川堅司儀、三組
頭中火術見分之節、小屋掛
懸合、不手配之儀御座ゟニ付、
詮議之上可申上旨、御〔沙汰〕之処、右詮議
遅滞仕、恐入ゟニ付、遠慮伺之儀、
以御用捨不及遠慮旨申遣之、
〔朱〕一作事請拂役駒井勝弥儀、石
「十九」渡川原ニ而三組頭火術御見分
小屋掛手配之節、御目付申聞之趣
手配方不行届、恐入、遠慮伺之通、
但、五日目ニ而 御免、 〔五八オ〕

74 〔一八二九〕文政十二年五月六日

一小野軍次郎儀、御供下之御次廻り、
御礼日ニ而茂、休息中ニ付罷出
不申ゟ儀与心得違、恐入、遠慮
伺之通、
但、十日目ニ而　御免、

〔五八ウ〕

75　同年十二月廿六日
一福士連蔵義、來寅年御聯
歴之内、土用九月三日ニ有之処、
八月三日与書損仕、恐入、遠慮
伺之儀、以御用捨不及遠慮旨
「〔朱〕廿」被　仰付ゟ、

〔五九オ〕

76　〔一八三〇〕天保元年三月十五日
一沢忠左衛門義、今日
御自宅之写拝見之節、無調法
有之、恐入、遠慮伺申出之、此度
之儀者以御用捨、不及遠慮旨
申遣之、

77　同年七月十二日
一奈良岡愿蔵儀、笠原八郎兵衛
慎中江日ニ罷越ゟ旨、御尋被
仰付、恐入、遠慮伺之通、
但、五日目ニ而　御免、

〔五九ウ〕

78　同日
一林延命左衛門義、笠原八郎兵衛
方江、百川千平儀、山鹿次郎作方江
慎中罷越ゟ儀、御尋被　仰付、恐入、
「〔朱〕廿一」遠慮伺之儀、以御用捨不及遠慮
旨申遣之、

〔六〇オ〕

79　〔一八三一〕天保二年正月廿八日
一松本道栄儀、去ル廿三日之夜
當番之処、實父松山玄三及
大病ゟニ付、罷出附添之処、當番
遅刻ニ及、差急ゟ得共、御門記ニ相成、
恐入、遠慮伺之通、
但、五日目ニ而　御免、

〔六〇ウ〕

80

〔一八三〇〕同元年三月十七日

一町奉行山形宇兵衛義、窄奉行安藤専吉末期願書付不埒之儀御座ゟ間、跡式被召上、恐入、遠慮伺之通、

但、五日目ニ而　御免、

同役對馬俊藏義茂同断之事、

81

〔一八三一〕同二年十一月晦日

〔朱〕「廿二」

一角田平右衛門儀、縁組願之儀ニ付、心得違之儀有之、恐入、遠慮伺之通、

但、十日目ニ而　御免、

〔六一オ〕

82

同日

一野上修理儀、伯母縁組願之儀ニ付、心得違之儀有之、恐入、遠慮伺之通、

但、十日目ニ而〔御免、脱〕

〔六一ウ〕

83

天保二年十二月廿七日

一勘定奉行古川忠左衛門・笹森百郎儀、勘定小頭葛西勇次郎義、御家中江御貸附御小納戸金取調方書損、吟味落ニ相成、恐入、遠慮伺申出之、當暮

〔六二オ〕

〔朱〕「廿三」

御小納戸御都合茂宜、其外茂御都合宜、精勤ニ付、此度者出格之御用捨を以、不及遠慮旨申遣之、

但、勇次郎ゟ茂申出、右同断ヶ仰付ゟ、

84

〔一八三二〕天保三年二月十一日

一御鷹匠須藤幾弥儀、御用御間欠ニ相成、恐入、遠慮伺之通、

但、二十七日目ニ而御免、

〔六二ウ〕

同役川越永作、同断之事、

〔七行分空白〕

〔朱〕「廿四」

〔六三オ〕

〔裏八行分空白〕

〔表八行分空白〕

〔朱〕「廿五」

〔裏八行分空白〕

十之弐

85 〔一八二五〕文政八年九月十一日

一大道寺次郎市申出ゟ、私於稽古所不取締之儀御座ゟニ付、門弟之内昨晩慎被　仰付、恐入、遠慮伺之儀、以御用捨不及遠慮旨被　仰付ゟ、

〔六三ウ〕

〔六四オ〕

〔六四ウ〕

86 〔一八二八〕同十一年十一月八日

〔朱〕「廿六」一齋藤甚五兵衛義、二男源八郎病屈ニ而氣分不宜、去ル朔日之夜与風他行いゝしゟニ付、方〻相尋ゟ内、於若黨町、棟方源之丞二男兼民江手疵負せゟニ付、此末一間所江厳敷押込置、様被仰付、尤右躰病屈ニ而氣分不宜ゟ処、其侭差出ゟ儀、不心得ゟ得共、此度者格段之御沙汰を以、甚五兵衛義御奉公遠慮伺之通被　仰付ゟ、但、十日目ニ而　御免、

〔六五オ〕

〔六五ウ〕

87 〔一八三〇〕天保元年九月七日

一成田勘之丞儀、二男銀藏儀氣分常躰ニ相成ゟニ付、一間所ゟ差出度義、伺之通被　仰付ゟ処、去月〔朱〕「廿七」廿八日栗拾ニ参、罷帰不申、秋田綴子ニ而氣分不宜、送返被仰付ゟ旨ニ而、碇ヶ關町奉行送届ゟ付、請取申ゟ、右御取扱ニ相成、恐入、遠慮伺之通、但、七日目ニ而　御免、

〔六六オ〕

88 天保元年二月七日

一野呂才吉儀、姉平井元三郎
母、常ミ氣隨増長、家事不取
締之旨ヒ及御聞、才吉方江引取置、
他出不致、様被　仰付、恐入、遠慮
伺之通、
但、五日目ニ而　御免、

〔六六ウ〕

89 同〔一八二二〕二年七月八日

一長尾定之丞儀、二男貞助儀
御詮議之筋有之、町同心手を以
〔朱〕「廿八」召捕、揚屋入被　仰付、恐入、遠慮
伺之儀申出之、不及差出旨、書付
致返却、旨申遣之、

〔六七オ〕

90 天保二年十月七日

一渡邊將監儀、昨年暇差遣ゆ
家來之儀ニ付、遠慮伺申出之、
以御用捨、不及遠慮旨被　仰付ゆ、

91 同日

一竹森又吉儀、門弟小泊大筒方
棟方源之丞・小野忠左衛門義、
大筒打方之節、御答之節、於御場所
前後仕、不心得ニ付慎被　仰付、
恐入、遠慮伺之通、
但、五日目ニ而　御免、

〔六七ウ〕

92 〔一八二六〕天保九年十月六日

一今李左衛門義、當御検見人被
〔朱〕「廿九」仰付、罷下ゆ跡ニ而、門弟三上又八
剱術　高覽之砌、無調法
之儀御座ゆ而、恐入、遠慮伺
申出、以　御用捨不及遠慮旨
被　仰付ゆ、

〔六八オ〕

〔四行分空白〕

〔六八ウ〕

〔表八行分空白〕

〔朱〕「卅」

〔六九オ〕

〔裏八行分空白〕

93　十之三

〔一八二五〕文政八年九月十四日

一關惣太郎申出ゟ、親小傳次門弟
藝道未熟之もの多御座ゝ旨
ニ而、被成御渡御書付之趣、恐入、
遠慮伺之通、

〔六九ウ〕

94　同年十月朔日

〔朱〕「卅二」一大道寺次郎市申出ゟ、弓術
導場取世話之者不取締ニ而、
門弟稽古怠惰未熟之族茂
御座ゟ旨被及　御聞、向後出精
致せゟ様被　仰出ゝ旨、今日御口達
之趣、恐入、遠慮伺之通、
但、五日目ニ而　御免、

〔七〇オ〕

95　〔一八三一〕天保二年五月廿四日

一岡左内儀、馬術
高覧被　仰出ゟ処、病氣御斷申上、
病氣与乍申、家柄不似合被
思召ゟ旨、恐入、遠慮伺申出、格段
之以
思召、此度者不及遠慮旨、被
仰付ゟ間、遠慮伺之儀令返却ゟ、
尤与得養生之上、出勤致ゟハゝ、

〔七〇ウ〕

〔朱〕「卅二」家柄之事ニ茂有之ゟ間、厚相舍、
稽古事者致度事与
思召ゟ旨、被　仰出ゝ旨申遣之、
但、同日病氣及御斷ゟ処、申出之趣
御聞届被　仰付ゟ、尤病氣ニ而者
無拠義ニゟ得共、家柄不似合
思召旨申遣ゝ処、本文之通、遠慮
伺申出ゟ事、

〔七一オ〕

96　〔一八三六〕天保九年十一月三日

一成田源左衛門義、今日剱術御見
分被　仰付ゟ処、詰刻限遅刻仕、

〔七一ウ〕

恐入ゆニ付、遠慮伺之通、
但、十五日目ニ而　御免、

97　同年十月六日
一桜庭兵右衛門義、馬術
高覧被　仰出ゝ処、實父石山八十八
「〔朱〕卅三」親喜兵衛積氣強、難見放附添、
御斷申上、〔七二オ〕
高覧江罷出ゆ儀
御免奉願ゆ処、御尋之趣、恐入、
遠慮伺之儀、實父附添之儀ニ付、
以　御憐愍、以御用捨不及遠慮
旨被　仰付ゆ、〔已〕已後
高覧被　仰出ゆハゝ、附添ニ而茂
罷出ゝ様被　仰付ゆ、〔七二ウ〕

「〔朱〕卅四」〔七三オ〕
〔表八行分空白〕
〔裏八行分空白〕〔七三ウ〕

十一

「〔朱〕卅五」〔七四オ〕
〔七行分空白〕
〔裏八行分空白〕〔七四ウ〕

十二

98　〔一八三五〕天保六年十月四日
一清野幸之丞儀、平館湊目付
之処、同所出火之節、御番所類焼
仕、恐入ゆニ付、遠慮伺申出、不及
遠慮旨申遣之、〔七五オ〕
〔二行分空白〕

「〔朱〕卅六」〔七五ウ〕
〔裏八行分空白〕

十三

〔七行分空白〕

〔朱〕「卅七」

〔七六オ〕

〔裏八行分空白〕

〔七六ウ〕

十四

〔七行分空白〕

〔朱〕「卅八」

〔七七オ〕

〔裏八行分空白〕

〔七七ウ〕

十五

99 〔一八二七〕文政十年四月十八日

一廻間忠藏義、組之者慎被　仰付、
右御免後、右之儀ニ付遠慮伺
之通被　仰付、三日目ニ而　御免之処、
右組之もの役下被　仰付ゟ儀ニ付、
遠慮伺又ミ申出之、不及差出旨
〔朱〕「卅九」ニ而書付相返之、

〔七八オ〕

100 〔一八二一〕天保二年正月廿七日

一後藤多宮儀、高岡小人葛西
久之丞無調法之儀御座ゟ而、祭司
下役格御取放被　仰付、恐入、遠慮
伺之儀不及差出旨被　仰付、書付
御返し、、

101 〔一八三三〕同四年十一月五日

一工藤乙弥弟忠作儀出奔、尤乙弥
義親形藏忌中ニ而罷有ゟ旨、
佐藤八弥与り申出ゟ、尤乙弥儀
未御奉公茂不申上ゟ得共、遠慮
伺申出之、以御用捨不及遠慮旨
申遣之、

〔七八ウ〕

102 同年三月廿二日

一築館亭助義、冨田御屋鋪泊
〔朱〕「四十」番之節、物置錠前被切破、御道
具之内紛失、恐入、遠慮伺之通、
但、三日目ニ而　御免、

〔七九オ〕

103
〔一八三六〕天保七年十二月廿五日
一渡邊将監義組成田左仲預
組佐藤常八郎・齋藤九郎次郎儀、
無調法之儀御座ゟ而、御役下并
退役被　仰付、遠慮伺申出之、〔七九ウ〕
壱人役ニ付、格段之御沙汰を以、
不及遠慮旨被　仰付ゟ、
〔七行分空白〕
「〔朱〕四十一」〔八〇オ〕
〔裏八行分空白〕〔八〇ウ〕

十六

104
〔一八二六〕文政九年四月十五日
一永沢平太・鳴海清左衛門申出ゟ、
居宅之間与り出火、居宅焼失
恐入ゟニ付、両人共御奉公遠慮
伺之通、　但、七日目ニ而　御免、

105
同年九月十日
一今弥十郎儀、常盤山御茶屋
「〔朱〕四十二」〔八一オ〕
御馬見所御畳、八畳相見得不申、
恐入、遠慮伺之通、
但、同十二日　御免被　仰付ゟ、

106
〔一八三七〕天保八年十一月十一日
一芳賀左門儀、鍛冶町大場掛合
之処、盗賊入、柾木舞盗取ゟ者
搦置、町同心御差向之儀、御取扱
相成、恐入、遠慮伺之上、〔八一ウ〕
但、七日目ニ而　御免、

107
〔一八三八〕同九年九月朔日
一諸与力并　御目見以下之者、
是迄居宅出火之節、類焼無之共、
遠慮又者押込ホ、頭方ニ而申付ゟ
得共、〔已〕已來類焼無之節者、御用捨
を以遠慮押込ホ申付ニ不及旨、
「〔朱〕四十三」被　仰付ヽ旨、向ヽ江申遣之、〔八二オ〕

108 天保九年十一月十一日

一古平八左衛門義、鍛冶町大場
諸拂役之処、柾木舞被盗取、尤
盗取者、召捕方御取扱ニ相成、
恐入、遠慮伺之通、
但、同廿七日葛西惣太左衛門・松下
岩次郎同断之事、

109 同年十二月廿一日 〔八二ウ〕

一成田八左衛門義、先年呼取之表坊主
成田栄弥儀、江戸詰合之処、
出奔之旨申來、恐入、遠慮伺申
出之、不及差出、書付御返被　仰付ゟ、

110 同日

一折笠幾之丞儀、甥表坊主成田
栄弥、於江戸表出奔ニ付、御奉公
遠慮伺申出、格段御沙汰を以、〔朱〕「四十四」
不及遠慮旨申遣之、
但、同人儀、炭御蔵懸合之処、 〔八三オ〕

此節御用炭并御家中渡手配方
格別御用繁ニ而、同人引籠ニ
相成ゟ而者、差懸御用支之儀
ニ付、格段御沙汰被　仰付度旨、
御元〆勘定奉行与り内意申出、
本文之通被　仰付ゟ、 〔八三ウ〕

〔表八行分空白〕 〔八四オ〕

〔朱〕「四十五」

〔裏八行分空白〕 〔八四ウ〕

巻ノ二十二ノ上

凶事

遠慮〔朱〕「一」
慎〔朱〕「十四」
御呵押込〔朱〕「卅八」
出座定
町役在役浦々九町在之もの御呵〔朱〕「四十七」
附黒石家中浪人共

（町在之者追放ニ付〔朱〕「四十五」
御家中遠慮）

〔八五オ〕

一

〔裏八行分空白〕

遠慮

111 〔一八三九〕天保十年十二月十六日

一齋藤甚五兵衛義、二男源八郎質銀
取組ゟ儀相聞得、吟味之処、い細申出ゟ得共、
悉皆取繕ニ而、元來悪銀取組ゟ以多し
ゟ處ゟ、持合有之趣、無相違、尚又先年
御咎茂被　仰付、義ニ付、其方江御預之上、
〔朱〕「一」厳敷他出差留被　仰付、尤其方義
〔口取紙〕「天保十年ヨリ」不心付之處ゟ、右躰之義有之、不届ニ付、
御奉公遠慮被　仰付、、
但、十日目ニ而　御免被　仰付、、

〔八五ウ〕

〔八六オ〕

112 〔一八四二〕天保十三年八月廿五日

一阿部半次郎儀、門弟成田文司儀、一昨
廿三日御家老中為
御名代砲術御見分之節、酒給ゟ様子ニ而、
不取締之儀有之、必竟其方常々門弟
教授等閑之処ゟ、右躰之儀有之、心得違之
至ニ付、御奉公遠慮被　仰付、、
但、七日目ニ而　御免被　仰付、、

〔八六ウ〕

113 同年九月八日

一御馬廻與力佐藤常藏儀、去丑年三月
十四日着類被盗取ゟ一件、吟味之処、亀甲町
日雇清吉与申もの疑敷ものニ付、同人娘
詮議之処、合談之上、親清吉ニ盗取せ、旨
〔朱〕「二」申出ゟ間、以　御威光御詮議被　仰付度旨、
〔委〕い細申出ニ付、右之もの共再應厳重詮議
之処、清吉儀決而盗取、覚無之旨、尤揚
屋入之もの共内、冨野村惣五郎申分ニ者、
油川村盗賊仁太郎与申もの、前書
常藏与り盗致旨風聞承居、旨、申
出茂有之、然者、全清吉ゟ所為ニ相聞得
不申、必竟證拠も無之儀、只疑而已
右躰御扱向申出ゟ義、甚心得違ニ付、御奉公
遠慮被　仰付、、　但、〔マヽ〕日目ニ而　御免、

〔八七オ〕

〔八七ウ〕

114 〔一八四三〕天保十四年三月廿六日

一手塚太郎兵衛義、京都御留守居勤中
借財有之処ゟ、此度御引請被　仰付ゝ、
然者御給分不相當過分之借財以多し、
等閑之処ゟ、段ゝ御取扱ニ相成、不届ニ付、
〔朱〕「三」急度可被　仰付ゝへ共、格段之以御沙汰
御奉公遠慮被　仰付ゝ、
但、十五日目ニ而　御免被　仰付ゝ、

〔八八オ〕

115 〔一八四三〕天保十四年八月廿四日

一町奉行申出ゝ、町目付新山乙次郎儀、
先頃実母病死之節、葬式大造ニ執行ゟ
御時合柄不勘弁ニ付、日数廿日御奉公
遠慮申付ゝ旨承届ゝ、

116 同年閏九月十七日

〔八八ウ〕

一喜多村監物申出ゝ、拙者預組御手廻
四番組番頭對馬與右衛門義、勤向心得
違之儀御座ゟ旨、御奉公遠慮申付度義、
伺之通、

117 同日

一右同人申出ゝ、預組御手廻四番組中畑
久米弥義、加役之儀ニ付、一己之我意を募、
〔朱〕「四」組一統之御締合ニ相拘ゟ間、御奉公遠慮
申付度義、伺之通、

〔八九オ〕

118 天保十四年十月廿三日

一御留守居支配三上市五郎儀、去五月六日
入内村寅助与申もの狼籍以多し、ニ付、
切付ゝ旨、い細申出、吟味之処、寅助義
不届之ものニ付、急度御締被　仰付ゝ間、
其旨差心得ゟ様、尤市五郎難澁ニ有之
共、其筋江申出茂無之、永ゝ在方ニ居合
ゟ義、不届ニ付、急度可被　仰付ゝへ共、格段
御沙汰を以、御奉公遠慮被　仰付ゝ、
但、五日目ニ而　御免被　仰付ゝ、

〔八九ウ〕

119 同年十二月三日

一薄田勇次郎儀、昨年四月支配所新町之
酉藏義、柳町之丑藏与喧嘩以多し、

西藏相果ゟ旨、風聞有之ニ付、死骸見分
申付ゝ處、半身色変其外二ヶ所色
〔朱〕「五」 變ゟ処有之ゝ得共、病死ニ相違無之旨 〔九〇オ〕
申出ニ付、葬方申付ゝ旨、然者丑藏
所為ニ而西藏相果ゝ旨風聞も有之、
殊ゟ死骸見分之表ニ向ゟ而も、右躰色
變ゟ處ゟ有之旨申出ゝハゝ、丑藏者勿論、
喧咤之場江立臨ゟもの共ニ至迄、厳重
詮議可致ゟ処、無其儀、猶又丑藏引上
入窄被　仰付ゝ節、病氣之旨申出ゝハゝ、 〔九〇ウ〕
縄付之上、番人附置、厳重手當可申
付ゟ処、親荘吉江預置ゟ処ゟ、致出奔、
旁等閑之取扱不届ニ付、急度可被
仰付ゟ処、格段之御沙汰を以、御奉公遠慮
被　仰付ゝ、
但、九日目ニ而　御免被　仰付ゝ、

120
〔一八四五〕弘化二年三月廿九日
〔朱〕「六」一御馬廻与力吉町文弥・小野善司儀、去ゝ 〔九一オ〕

年九月廿一日四ノ北御門當番之節、
鳶之もの共作事方ゟ材木盗出し、
同所御門外江取賦ゟ一件、吟味之處、
い細申出之趣も有之　へ共、申和解難
相立義者則夜五時前之義ニ有之、最初
与り有躰ニ可申出ゟ処、無其儀、尚又
夜五時前御門御締不致内ハ、御番所
前氣を付相勤可申ゟ処、風吹ゟ旨 〔九一ウ〕
障子等メ切ゟ処ゟ、右躰盗木ゟ取出し、
旁不届ニ付、御奉公遠慮被　仰付ゝ、
但、十六日目ニ而　御免被　仰付ゝ、

121
弘化二年四月晦日
一和嶋傳助儀、大光寺村長三郎并館田村
五郎市与申もの、去〔夏〕度江戸表江御呼出
一件、
公邊御取扱ニ相成、不届ニ付、御奉公
「七」 遠慮被　仰付ゝ、 〔九二オ〕
但〔マヽ〕日目ニ而　御免被　仰付ゝ、

122 弘化二年十二月廿三日

一佐藤兵八儀、先頃於蟹田町稽古角力興行聞届申付丶ニ付、詮議之処、い細答書を以申出、然ハ旅人御締方之儀者、去十二月改而厳敷被　仰付も有之間、町役共願出丶ハ丶、可申出ゟ処、無其儀、一存ニ而聞届丶段、等閑之勤方ニ付、御奉公遠慮被　仰付丶、

〔九一ウ〕

但、五日目ニ而御免被　仰付丶、

123 〔一八四六〕弘化三年二月十七日

一勘定人金沢藤次郎ゟ御徒ゟ勘定人加勢爪田弁次郎迄五人、勘定聞方席取扱之処、去十月廿日北御蔵勘定帳御蔵行持参、同席江差出、夫〻出目録江引合、受取方相濟、其後吟味方江取付ゟ処、作事方御賄米渡御印手形弐枚相見得不申旨、内意申出茂有之ゟへ共、扱席も乍相勤、御印物取扱方等閑之至、不締ニ付、御奉公遠慮被　仰付丶、

〔朱〕「八」

〔九三オ〕

124 弘化三年九月六日

一御手廻今十兵衛儀、五所川原御蔵立合勤中、御印紙江染付丶ニ付、御印書替被　仰付度旨申出、然者御太切御印取扱向等閑之処ゟ、右躰之儀有之、不締ニ付、御奉公遠慮被　仰付丶、

〔九三ウ〕

但、前書五人之面〻過料銀壱枚上納被　仰付丶、尤五人ニ而銀壱枚也、

125 同年十月六日

一買物役格赤平雪吉弟白吉儀、當六月廿日之夜古学校御門巻金盗取ゟ義ニ付、吟味之処、則夜中ニ無之、同月十日之夜盗取丶義、甚不届もの ゟ付、急度可被　仰付丶得共、格段之以御沙汰、揚屋出之上、兄雪吉江御預、他出差留申付丶、尤雪吉儀、弟不届之儀有之、不埒ニ付、御奉公遠慮被　仰付丶、

〔朱〕「九」

〔九四オ〕

但、三十日目ニ而御免被　仰付丶、

126

〔一八四七〕弘化四年六月三日 〔九四ウ〕

一勘定人大和田権作、同加勢御徒三橋才吉
義、去六月三日勘定所泊番之処、品々
紛失致ゟ旨、い細申出、然者當番ニゟハ、、急度
御締相立可申処、役所内ニ有之諸品被盗取
ゟ儀、不締ニ付、御奉公遠慮被　仰付、、
但、十日目ニ而　御免被　仰付、、
一右ニ付、小使茂右同断ニ而、御締向有之、

127

〔朱〕「十」同八日 〔九五オ〕

一竹森六之助弟末吉儀、去月十四日
春日了星場稽古帰之節、座當町
裏通ニ而殺生ゟ趣相聞得、詮議之処、
答書申出ゟ得共、其向申出有之上者、取繕
相聞得、然者兼而厳重被　仰付方も有之
處、心得違之致方不届ニ付、慎被　仰付、、
尚又六之助義、師範家ニ乍有、教諭向
等閑之処ゟ、右躰之儀有之、不届ニ付、御奉公〔九五ウ〕
遠慮被　仰付、、
但、末吉義三十日、六之助義五日目ニ而
御免被　仰付、、

128

〔一八四一〕天保十二年十月六日

一御馬廻工藤四郎太義、限賃取ゟ儀ニ付、
御奉公遠慮被　仰付、、
但、十日目ニ而　御免、尤森岡民部宅ニ而
申渡、四郎太義御用番民部組也、
先例有之ゟ而申渡、事、 〔九六オ〕

〔朱〕「十一」

129

天保十二年十一月七日

一後藤多宮儀、高岡御門前之もの共江、御同所
御〔殺〕宸花金、祭司役限ニ而貸付ゟ段、心得違
ゟ付、御奉公遠慮被　仰付、、
但、七日目ニ而　御免被　仰付、、

130

同年十二月十二日 〔九六ウ〕

一會田熊吉儀、弟仁助高崎村裏通
ニ而鉄炮打ゟ処、御鷹匠廻先ニ而見當、鉄
炮投捨逃去ゟ旨、昨年厳敷被　仰付も
不憚、不届ニ付、急度可被　仰付、へ共、格段之

以　御憐愍、他出差留之上、熊吉江御預被
仰付、尚又師範家乍有、教諭方等閑之
處ゟ、右躰之義有之、不届ニ付、御奉公遠慮
被　仰付、、

「十二」〔朱〕　但、七日目ニ而　御免被　仰付、、　〔九七オ〕

〔裏八行分空白〕　〔九七ウ〕

〔表八行分空白〕

「十三」〔朱〕　〔九八オ〕

〔裏八行分空白〕　〔九八ウ〕

二　慎

131　天保十三年三月五日〔一八四二〕

一大組足軽小山内久太郎儀、去ル二日途中ニ而
對馬刑部江無禮之儀有之、不届ニ付、慎
被　仰付、、
但、廿日目ニ而御免被　仰付、

132　同年四月十六日

「十四」〔朱〕一御徒葛西久兵衛、先達而御制服之義
厳重被　仰付も有之処、妻二月八日　〔九九オ〕
分限不相當之衣類ニ而致往來ゟ旨、
尤同日他行不致旨共申出ゟ得共、全
相違之申出、御時合をも不弁、申付方
緩せ之処ゟ、右躰不埒之儀有之、不届ニ付、
急度可被　仰付、へ共、此度者格段之以
御沙汰、慎被　仰付、、
但、三十日目ニ而　御免被　仰付、、　〔九九ウ〕

133　同年五月十九日

一平井元三郎儀、去ル八日馬術御検分之節、
分限不相當之所着用い多し、心得違ニ付、
其段頭方を以御詮議被　仰付、処、申和解難
相立我侭之義申出、旧冬御觸出并御時合をも
不憚、不埒之至ニ付、急度可被　仰付、へ共、
格段之御沙汰を以、慎被　仰付、、

「十五」〔朱〕　但、廿日目ニ而　御免被　仰付、、　〔一〇〇オ〕

134 天保十三年八月廿五日

一御留守居支配福士伊作儀、嫡子願申出、養子相返、実子相立ゐ義、難被　仰付部ニゐ得共、此度者格段之御沙汰を以、願之通被　仰付、、尤初養子申立、節、其子之病症等閑ニ相心得ゐ処ゟ、御取扱ニ相成、不埒ニ付、慎被　仰付、、

但、廿日目ニ而御免被　仰付、、　〔一〇〇ウ〕

135 同日

一御馬廻與力成田文司儀、一昨廿三日御家老中為御名代砲術御見分人節、酒給、様子ゑ而、不取締之義有之、不届ニ付、慎被仰付、、

但、三十日目ニ而　御免被　仰付、、尤同日師範家も遠慮被　仰付、、　〔一〇一オ〕

136 〔朱〕「十六」 〔一八四三〕天保十四年三月十三日

一御目見以下御留守居支配三浦文八儀、新長屋御門番持切之處、忰代番ニ差遣、自分義者出勤無之旨相聞得、詮議之処、い細申出有之ゐへ共、悉皆取繕ニ無相違相聞得、不埒ニ付、急度可被　仰付、へ共、格段之以御憐愍、慎被　仰付、、但、三十日ニ而御免、　〔一〇一ウ〕

137 同年五月十六日

一御目見以下御留守居支配板垣孫六儀、親類大組足軽三上常次郎女房殺害以多しゐ義ニ付、最初申立ニ者、常次郎發狂ニ而女房打殺ゐ旨申出有之処、追〻常次郎与り發狂ニ無之、密通致ゐニ付手打致ゐ旨申出ニ付、其段詮議之処、い細申出有之ゐ得共、常次郎儀全乱心相違無之処、追〻常次郎申出書付其侭差出せゐ義、取斗向旁不埒之致方、不届ニ付、慎被　仰付、、

但、諸手警固奈良弥十郎同断、不届ニ付、慎申付、、〔マヽ〕日目ニ而　御免、　〔一〇二オ〕

〔朱〕「十七」

138 天保十五年八月廿六日

一石郷岡三太夫義、當三月十日之夜
出火之節、火消番ニ而罷越ゟ處、於途中
不法ニ手向ゟ者有之、不得止事切付ゝ旨、
い細申出ゟへ共、組足軽并家來ゟ茂召連ゝ義
故、取斗方可有之処、麁忽之致方不届ニ付、
慎被　仰付ゝ、
但、三十日目ニ而　御免被　仰付ゝ、

〔一〇二ウ〕

139 同年十一月十二日

一大組足軽工藤織之助ゟ御持鑓幸吉
〔朱〕「十八」迄六人當江戸交代下之処、道中ニ而
病氣之旨ニ而居残、迎登ゟ申立、御取
扱相成罷下、然處全病氣ニ無之、不心
之処ゟ路用ゟ不足以多し、虚病相
工ミ、右躰御扱ニ相成、御時合をも不相弁、
不埒之もの共ニ付、慎申付ゝ、以來江戸
登并諸在勤差留被　仰付ゝ、
但、三十日目ニ而　御免被仰付ゝ、

〔一〇三オ〕

140 〔一八四五〕弘化二年四月晦日

一工藤市左衛門・木村左源太儀、組下
大光寺村長三郎并館田村五郎一与申
もの、去夏
公邊御呼出之処、出奔以多し、義者、質金
一件ニ付、南部出生無宿己之松事与助江
懸念有之趣ニ相聞得、重御取扱ニ相成ゝ義、
必竟兼ミ百姓共へ御締申付方緩せ
〔朱〕「十九」之処ゟ、右躰之もの有之、不届ニ付、慎
被　仰付ゝ、
但、〔マヽ〕日目ニ而　御免被　仰付ゝ、

〔一〇四オ〕

141 弘化二年六月十六日

一御制服之儀ニ付、近年厳敷被　仰付茂
有之処、買物役格新山乙次郎妻、去ミ
月十日分限不相應之衣類ニ而往來
いゝし、旨、相聞得ゟ間、其段詮議之処、
同日他行不致旨申出、其後ニ至り
相考ゟ処、同日他行致し、美服ハ不致旨、
又ミ答書差出、全相違之申出、殊ニ答書

〔一〇四ウ〕

差出方、麁忽之致方、不届ニ付、急度
可被　仰付、へ共、格段以御沙汰、慎被
仰付、、
但、〔マヽ〕日目ニ而　御免被　仰付、、

142　同年九月三日
〔朱〕「廿」一御城附警固福田多七儀、常々行状
不宜、其上継母并家内不睦之旨相　〔一〇五オ〕
聞得、詮議之処、い細申出茂有之ゆへ共、常々
不嗜之旨、無相違相聞得、不届ニ付、
慎被　仰付、、
但、三十日目ニ而　御免被　仰付、、

143　同年十月廿九日
一七戸修理・菊池文太郎儀、亀甲御蔵
勤中、御米致内貸、不筋之差略ゟ　〔一〇五ウ〕
有之、御賦欠ニ相成、不届ニ付、急度可被
仰付、へ共、格段之御沙汰を以、慎被
仰付、、
但、三十日目ニ而　御免被　仰付、、

144　同日
一工藤傳太郎・太田源八・對馬常作義、
北御蔵勤中、御米致内貸、猶又永々
〔朱〕「廿一」一重俵ニ致置、撰方ゟ不吟味ニ有之、等閑　〔一〇六オ〕
取扱不届ニ付、急度可被　仰付、へ共、格段
御沙汰を以、慎被　仰付、、
但、卅日目ニ而　御免被　仰付、、

145　同日
一工藤弥門ゟ浪田貞作迄五人、板屋野木并
藤崎御蔵勤中、青森御蔵江駄下米
相済不申内、御代官江済下一紙ゟ差出、
永々滞米ニ相成、御廻船積入差支、不届　〔一〇六ウ〕
ゟ付、急度可被　仰付、へ共、格段之御沙汰を以、
慎被　仰付、、
但、卅日目ニ而　御免被　仰付、、

146　同日
一佐藤弥代吉親八郎太、御馬廻勤中、同断
ゟ付、八郎太儀慎被　仰付、、

但、〔マヽ〕日目ニ而　御免被　仰付ヽ、

147 弘化二年十二月九日　〔一〇七オ〕

「廿二」〔朱〕寺田百之丞儀、當十月廿四日當番之節、給酔、物言ふ前後以多し、聲高之儀有之旨相聞得、御城中禁酒之御場所をも不憚、右躰之義有之段、不埒ニ付、慎被　仰付ヽ、

但、廿日目ニ而　御免被　仰付ヽ、

148 弘化二年七月廿三日　〔一〇七ウ〕

一宮城平五郎義、當三月五日之夜、松井四郎兵衛忰淳五郎・町物書高屋得司同道ニ而、所ヽ相廻、淳五郎義親方町自身番之ものへ手疵を負ゆ(せ)旨相聞得、詮議之處、右躰之義無之旨、い細申出之趣も有之ゆ得共、必竟常ヽ不心得之義有之趣、無相違相聞得ヽ間、厳重可被仰付ヽへ共、格段之御沙汰を以、慎被　仰付ヽ、

「廿三」〔朱〕尤以來急度相慎ゆ様被　仰付ヽ、　〔一〇八オ〕

149 同日

一町物書高屋得司、右同様被　仰付ヽ、

但、〔マヽ〕日目ニ而御免被　仰付ヽ、

150 〔一八四六〕弘化三年正月十八日

一桜庭兵右衛門申出ヽ、支配組大組足軽安田宇八郎義、去ル十二日御参詣之節、於御供先過酒致ゆ旨、御場所も不相弁、不届ニ付、私共ニ而厳敷慎申付ヽ旨達、　〔一〇八ウ〕

151 同日

一御徒頭申出ヽ、御徒菊池八百吉・山内小藤太義、右同様不届ニ付、私共ニ而慎申付ヽ旨申出達、

152 同年三月六日

一御徒菊池八百吉義、當正月十二日於御供

〔朱〕「廿四」先心得違之儀有之ニ付、御自分共ニ而
慎申付置、得共、其節過酒之上御供
欠ニ相成ゟ段、不届ニ付、急度可被
仰付ゟ得共、格段之御沙汰を以、慎
御免被　仰付、、以來急度相嗜ゟ様被
仰付、、
但、〔マヽ〕日目ニ而　御免被　仰付、、

〔一〇九オ〕

153 同日

一右ニ付、八百吉親鉄弥江、厳敷致教戒ゟ様、
同人親・頭方江申遣之、

〔一〇九ウ〕

154 弘化三年四月六日

一御留守居支配武林平四郎儀、旅人止宿
致せ、義ニ付、詮議之処、右躰之儀無之旨
申出、へ共、其筋申出有之上者、取繕ニ無相
違相聞得、御締合ニ相拘、不届ニ付、慎被
仰付、、　但、三十日目ニ而　御免被　仰付、、

〔一一〇オ〕

155 同年五月廿三日

〔朱〕「廿五」一御目見以下御留守居支配佐川勇司儀、
土手町三次郎名題之家屋敷ニ住居
以多し、大鰐村出生久太与申もの、右久太
博奕宿致、義、願済ニも無之もの借屋ニ
差置、其上御締向申付緩せ之處ゟ、借屋
之もの博奕宿以多し、不埒ニ付、慎被
仰付、、但、三十日目ニ而　御免被　仰付、、

〔一一〇ウ〕

156 弘化三年六月十九日

一御馬廻與力菊池八百次郎・桜庭忠太郎儀、
去月廿八日外南御門當番之節、御目付
差圖不相用、殊ニ於番所ニ不締之儀有之、
不届ニ付、慎被　仰付、、
但、三十日目ニ而　御免被　仰付、、

〔一一一オ〕

157 同年七月廿三日

一大組警固岩間熊次郎・諸手足軽花田
〔朱〕「廿六」角次郎儀、去七月於江戸表ニ御荷物宰料
被　仰付、節、所〻ゟ荷物預、右之内被盗取
ゟ義ニ付、吟味之処、い細申出、然者御用荷物

宰料被　仰付、右躰預荷物以多し、段、
御締合相拘、不埒ニ付、慎申付、、
但、三十日目ニ而　御免被　仰付、、

158
弘化三年十月廿日
一町奉行申出、、牢奉行加勢松本銀藏
義、去ル六日當番之処、七日暁八半時　〔一一一ウ〕
牢舎之内、新城村元助儀揚屋扳以多し
ゐ旨申出ゐ間、始末詮議之処、い細申出ゐへ共、
必竟緩怠之処ゑ、右躰有之、尤銀藏茂
何分元助召捕御申和解相立申度、所ゝ
見聞之処、新城村ニ而召搦ゐへ共、御手数之
御扱ニ相成、不届ニ付、慎申付、旨達、

159
同月六日
〔朱〕「廿七」一御留守居組木村唯助四男幸次郎儀、
當六月十九日之夜、女引連、夜宮江罷越ゐ処、〔一一二オ〕
於南溜池土居通、御持鑓仲間弥七親忠吉
義、右女江徒致ゐゑ、揉合ニ相成、脇差を以
鞘打可致ゐ処、忠吉逃去ゐ旨、然処人違
ニ而其場ニ居合ゐ本多忠左衛門家來文吉
与申もの打付、鞘走、手疵を負ゐ段、相
詮議之処、い細申出も有之ゐへ共、常ゝ不慎
之旨相聞得、不埒ニ付、慎申付、、　〔一一二ウ〕
但、〔ママ〕日目ニ而　御免ヒ仰付、、尤右組合之ものも
有之、

160
弘化三年十一月廿三日
一御留守居支配小野雪助儀、川元貞吉祖父
喜惣司揚屋入之処、相勝不申、ニ付、快氣迄
宿下被　仰付、諸勤引取之上、喜惣司見継
被　仰付、尤快氣之処ニ而申出ゐ様被　仰付
〔朱〕「廿八」罷有ゐ処、出奔之旨申出、然者歩行存自由ニ
相成、ハ、、早速可申処、無其儀、致出奔ゐ者、〔はば〕〔一一三オ〕
其侭差置、扱方緩せ之段、不埒ニ付、慎被
仰付、、　但、〔ママ〕日目ニ而　御免被　仰付、、尤喜惣次
孫義も慎ヒ　仰付、、

161
〔一八四七〕弘化四年二月三日
一館美三郎儀、去三月十一日之夜、亀甲町

ゟ而工藤源之助致慮外之義ニ付、吟味之処、
い細申出、然者前書慮外之致方有之、打
果可申与切懸、義者、無余儀相聞ゆ得共、〔一一三ウ〕
必竟不慥之処ゟ、争論ニ及ゆ趣ニ相聞得、
尚又長坂丁小路ニ而、工藤恕助被組留、
町同心友ミ召捕ゆ節、御役名(性名)相名
乗、人違狼籍之旨申聞得、へ共、理不尽ニ
召捕ゆハ、、致方も可有之処、其侭被召捕、
縄目ニ相成ゆ段、不心得之致方、且又去六月
評定所於御座敷、三奉行詮議之節、
「(朱)十九」御目付之差圖不相用、旁不届ゟ付、
退役之上、親文内江御返慎被　仰付ゆ、〔一一四オ〕
但、三十日目ニ而　御免被　仰付、、

162　同日

一長崎忠兵衛忰周蔵儀、去三月十一日之
夜、亀甲町ニ而館美三郎江工藤源之助ゟ
致慮外ゆ一件、吟味之処、申出之趣取繕ニ
相聞得、尚又三郎儀全酒狂ニ相聞得不申、
仮令酒狂ニ而刀を抜ゆ共、致方も可有之処、〔一一四ウ〕
其場迯去ゆ段、不心得之至、不埒ニ付、慎
被　仰付、、
但、三十日目ニ而　御免被仰付、、

163　弘化四年二月廿七日

一御持筒足軽百沢源太儀、子善蔵去ル戌
年病死、同年二男善吉出生致、翌年
人別書上之節、筆も間違ニ而、生死書上
「(朱)三十」落ニ相成ゆニ付、人別引入直被　仰付度旨、〔一一五オ〕
申出、然者人別書上之義者、前ミ被
仰付も有之処、必竟等閑ニ相心得ゆ処ゟ、
右躰之義有之、不埒ニ付、慎被　仰付、、
但、十日目ニ而　御免被　仰付、、

164　同年三月廿九日

一御中小性ゟ留書、表右筆加勢工藤郡平儀、
一昨年江戸詰合之節、不筋之義有之、不届
ゟ付、親三平江御返之上、慎被　仰付、、〔一一五ウ〕
但、三十日目ニ而　御免被　仰付、、

165 弘化四年六月三日

一御持筒足軽川村寅六与り寺田重三郎迄

四人、去十月廿二日之夜、西ノ郭當番之處、

御武具蔵役所江盗賊入込、品々被盗取ゆ

義ニ付、御締向厳重被　仰付も有之処、必竟

勤方緩せニ付、慎被　仰付ゝ、

「朱廿二」　但、　二十日目ニ而　御免被　仰付ゝ、　〔一一六オ〕

166 弘化四年六月晦日

一今日進藤太郎左衛門宅江、大沢官助

呼上之上、相渡ゆ書取、左之通、

覚

津軽平次郎用達

山田忠次

右者普代用達之儀ニ付、平次郎

幼年中之儀ニ付、別而諸事取締可　〔一一六ウ〕

相勤之処、無其儀、常々我意ニ相募、其上

不取締之義有之旨相聞得、不届ニ付、

急度可被　仰付ゝへ共、格段之御沙汰を以、

給分之内、金壱両壱人扶持相減ゆ上、慎

被　仰付ゝ、　但、五十日目ニ而御免、

一右ニ付、諸事締向之義ニ付、大津友助江

被　仰付ゝ義、い細者御家中被　仰出之部江

「朱廿二」相記之、　〔一一七オ〕

167 弘化四年七月六日

一御留守居組前田吉郎伯父定吉儀、

浪岡村伴助与申もの、不法申募、其上

狼藉ニ及、進退相迫ゆ間、為凌致鞘打、

處、鞘走手負ゆ旨、い細申出、然者右

鉢浪藉ニ及ゆハゝ、致方も可有之処、為凌

鞘打ニ致ゆ段、其節之仕儀不宜、不束

之申出ニ付、他出差留、　御免之上、慎　〔一一七ウ〕

被　仰付ゝ、　但、廿日目ニ而　御免、

168 弘化四年八月二日

一御手廻足軽長谷川小左衛門義、當江戸

「以下虫損ニ付」（封紙上書）

一部閲覧停止」　〔一一八オ〕

〔三十九丁閲覧不能〕

十一　誓詞御飛脚登

201 〔一八三九〕天保十年九月晦日

一珎田祐之助・添田岩五郎申出ゝ、御役誓詞之節、間違之儀御座ゟ而恐入ゟ間、御奉公遠慮伺之通、　但、二日目ニ而　御免、

202 〔一八四三〕同十四年十一月十八日

一海老名権三郎申出ゟ、誓詞之儀間違〔朱〕「十九」御座ゟ而恐入ゟ間、御奉公遠慮、伺之通、　但、十日目ニ而　御免、　〔一五七オ〕

203 同年十二月七日

一田中太郎五郎、右同断被　仰付ゝ、

204 〔一八四一〕天保十二年九月十六日

一齊藤甚五郎申出ゟ、昨日誓詞之節、御座敷江脇差取不申罷出ゝ義、恐入ゟ間、御奉公遠慮伺之通、　但、七日目ニ而　御免、　〔一五七ウ〕

205 同日

一御目付原與四郎申出ゝ、右誓詞人繰出之節、不吟味之儀御座ゟ而、恐入ゟニ付、御奉公遠慮伺之通、　但、五日目ニ而　御免、

〔三行分空白〕

〔朱〕「廿」　〔一五八オ〕

〔裏八行分空白〕　〔一五八ウ〕

十二　御蔵御鍵湊順違目録違

206 〔一八四七〕弘化四年十二月廿五日

一會田熊吉申出ゟ、門弟海岸非常大筒方壱人過目論之趣与得詮議仕ゟ処、所持之細割、外師範家細割与書留違仕ゝ、處ゟ、過目論ニ恐入ゟニ付、御奉公遠慮伺申出之、以御用捨、不及遠慮旨被　仰付ゝ、

〔一行分空白〕

〔朱〕「廿一」　〔一五九オ〕

〔裏八行分空白〕

〔一五九ウ〕

十三　田方山方屋敷夜廻養子

〔七行分空白〕

〔一六〇オ〕

「〔朱〕廿二」

〔裏八行分空白〕

〔一六〇ウ〕

十四　諸渡物押物御用達

〔七行分空白〕

〔一六一オ〕

「〔朱〕廿三」

〔裏八行分空白〕

〔一六一ウ〕

十五　組支配

207　〔一八四四〕天保十五年十二月二日

一小山内織部申出ゝ、組足軽須藤春司儀、無調法之儀御座ゐニ付、當十月四日於江戸表ニ

御旗警固江役下被　仰付、恐入ゐニ付、御奉公遠慮、伺之通、

但、春司儀當三月爰元ニ而出火之節、火消番ニ而罷越、無調法有之、江戸表ニ而御呵ニ付之、〔一六二オ〕

「〔朱〕廿四」

208　〔一八四六〕弘化三年十二月廿四日

一成田左兵衛申出ゝ、支配組諸手足軽金沢常作義、無調法之儀有之、御給分被召上、永之御暇被下置、恐入ゐニ付、御奉公遠慮、伺之通、

但、本文常作義、預組ニ而不埒有之、御締向申立ゐ間、御用捨を以不及遠慮旨可被　仰付部ニゐへ共、不埒之趣穿鑿中へ書扱を以、詮議申付、其後御締　〔一六二ウ〕向申立ゝ義ニ付、沙汰之上、伺之通被　仰付ゝ、〔マヽ〕日目ニ而御免、

209　〔一八四七〕弘化四年五月十八日

一桜庭兵右衛門申出ゐ、大組足軽中田文作儀、昨年御廻船上乗登之処、船頭善兵衛儀手段之上御米賣拂、荷打之躰ニ申立、配金差出之趣、見分人江訴出ゐ得共、途中ニ

〔朱〕「廿五」おゐて変死ニ付、御給分可被召上ゆ得共、〔一六三オ〕
一旦訴出ゆニ付、新ニ俵子拾俵弐人扶持被下置、
長柄之者新規御召抱被　仰付、恐入ゆニ付、
御奉公遠慮、伺之通、

〔五行分空白〕〔一六三ウ〕

十六　変鐘失物咎人盗賊御預遠慮
欠所評定所出奔家來之儀ニ付
遠慮

210 〔一八三九〕天保十年七月七日
一御徒目付當麻勇次郎・勘定人福士勝五郎・
宮川常次郎申出ゝ、去三厩詰勤中、同所
御藏与り御備米被盗取、恐入ゆニ付、御奉公
〔朱〕「廿六」遠慮、伺之通、　但、七ヶ月ニ而御免、〔一六四オ〕

211 〔一八四三〕天保十四年十一月廿六日
一成田岩藏申出ゝ、去ル廿四日夜、居宅木部
屋之内焼失、恐入ゆニ付、御奉公遠慮伺

申出、不及遠慮旨ヒ　仰付ゝ、右ニ付御使番
申出ゆハゝ、同人青森在中ニ付、代リ下方之
義申出ゝへ共、前書之通被　仰付ゝニ付、不及
罷下ゝ旨被　仰付ゝ、

〔一六四ウ〕

212 〔一八四五〕弘化二年三月七日
一寺山新四郎申出ゝ、二男伊八郎義於江戸
表出奔仕、猶又右ニ付御取扱相成、恐入ゆ間、
御奉公遠慮、伺之通、
但、　日目ニ而御免、尤伊八郎儀勤学登之処、
出奔ニ付、本文之通、

213 〔一八四六〕同三年十月廿八日
一成田友次郎申出ゝ、去ル十一日之夜、北ノ丸
〔朱〕「廿七」御番所江悪もの忍入、品ゝ被盗取、御場所柄〔一六五オ〕
之儀恐入ゆニ付、御奉公遠慮伺申出ゆ得共、
軽品紛失之分、殊ニ泊番茂無之御場所ニ付、
以御用捨不及遠慮旨被　仰付ゝ、
但、十一月朔日組合今雑届同断被仰付ゝ、

214 弘化四年〔一八四七〕二月十四日

一長崎慶助申出、、家來喜八儀無調法之儀
御座ゟ而、於私方ニ押込被　仰付、恐入ゟニ付、
御奉公遠慮伺申出、御沙汰中、諸勤是迄之通　〔一六五ウ〕
被　仰付、同月十三日伺之通被　仰付、、
但、三日目ニ而御免、

215 同日

一木村李之助家來幸吉・外崎平左衛門
家來末吉義、無調法之儀有之、押込被
仰付、恐入ゟニ付、御奉公遠慮、伺之通、
但、同断、

216 同五日　〔一六六オ〕

「〔朱〕廿八」一大郷七十郎家來熊作義ニ付、右同断
被　仰付、、但、三日目ニ而　御免、粹義親伺之通、

217 同月六日

一大郷常五郎申出、、親長七郎義右同断
被　仰付、恐入ゟニ付、御奉公遠慮、伺之通、

218 弘化四年六月三日

一須藤門之丞・三上幾弥申出、、去十月
廿二日之夜、御武具藏御役所江差置、御品　〔一六六ウ〕
物之内被盗取、恐入ゟニ付、御奉公遠慮、伺之通、
但、日目ニ而　御免、

219 同日

一古川仁太郎ゟ葛西亀吉迄五人、右
同断、

220 同日

一三上宇源司・成田卯吉申出、、去十月
「〔朱〕廿九」紙御藏御役所江差置、品紛失、恐入ゟ　〔一六七オ〕
ゟ付、御奉公遠慮伺之儀、軽キ品紛失殊ニ
泊番茂無之御場所ニ付、以御用捨、不及
遠慮旨被　仰付、、

221 同日

一御馬廻與力工藤幾弥ゟ鎌田八太郎迄
八人申出ゟ、去十月廿五日外四ヶ所御門番

之処、刻夜ニも有之哉、紙御藏ニ而紛失品
有之、恐入ゟニ付、御奉公遠慮伺之儀、以　〔一六七ウ〕
御用捨不及遠慮旨被　仰付、、

222 同月八日
一御武具奉行ゟ手代加勢迄数人、右同断
被　仰付、、

223 弘化四年六月十一日
一櫛引左門・福士要次郎・三上幾弥申出、、
御飛脚御用状扣入置、櫃、是迄御飛脚
「三十」〔朱〕番見継仕、古来ゟ御日記方二階入口江
差置ゟ処、當五月九日夜右櫃掛鉄
取迦御帳紛失恐入ゟニ付、御奉公遠慮
伺申出、以御用捨不及遠慮旨被　仰付、、　〔一六八オ〕

224 弘化四年九月八日
一織田儀六郎申出、、青森御藏奉行
此節壱人勤伺之通被　仰付、昨暁罷上リ
申ゟ処、家来仁太郎儀無調法之儀御座ゟ而、
當七月鞭刑被行、弘前徘徊是迄之通　〔一六八ウ〕
被　仰付〔出書〕、恐入ゟニ付、御奉公遠慮、伺之通、
一右ニ付、忰虎五郎義茂伺之通、
但、両人共五日目ニ而　御免、

225 弘化四年十一月四日
一白取数馬申出ゟ、家来忠吉義無調法
之儀御座ゟ而押込被　仰付、恐入ゟニ付、御奉公
遠慮伺申出、以　御用捨不及遠慮旨被
「三十一」〔朱〕仰付、、　〔一六九オ〕

226 同日
一沢昇作、同断之事、

227 同月六日
一岡勝左衛門申出、、家来藤助儀御制禁を
犯、稲荷宮境内ゟ伐木之儀ニ付被打
擲相果、御取扱ニ相成、此度懸合之もの
御締□〔出書〕被　仰付、恐入ゟニ付、御奉公遠慮、
伺之通、　但、松山道圓義も同断之事、　〔一六九ウ〕

〔以下、異筆〕〔虫損〕〔カ〕
十七伺遠慮諸事

228 〔一八四五〕
弘化二年四月十三日

一諸在勤之族、親〔虫損〕類之儀ニ付遠慮伺差出ゟ
節、被　仰付有無ニ不拘、是迄代伺之上罷上ゟ
〔貼紙※〕
得共、御費之儀も有之ニ付、〔虫損〕諸在勤之節
者、御用相濟罷上りゟ処ニ而、遠慮伺差出ゟ
〔虫損〕
様被　仰付ゟ間、可被差心得居旨、御日記役
〔朱〕
「三十二」被　仰付、　〔一七〇オ〕

229 〔※貼紙〕〔一八六七〕
一慶應三年五月十九日

一親類之分、家内二三男ニ而も、遠慮慎
〔虫損〕
□ハ父兄在勤之節、交代欲當分
〔虫損〕
□筈ニ頭方ニ而御取究之旨成田殿ゟ
〔虫損〕
□仰付、　但、慶應二年二月廿七日当例をゟ之、」

〔裏八行分空白〕　〔一七〇ウ〕

国立史料館所蔵の『御用格』巻二十二は、別々に作成された四冊（とりあえずイ・ロ・ハ・ニと称する）を一つに綴じ合せたもので、その構成はつぎの通りである。なお標題のうち〔　〕内は、事例を欠き標題のみであることを示す。

イ　巻二十二　（文政八年～天保九年）　件数

一　出座定　一
二　慎　二七
三　遠慮・御呵・押込　一三
四　町在之儀ニ付御家中遠慮　〇
五　町役浦々在役凡而町在之者御呵　一一
〔附黒石家中浪人共〕
（詳細は表1を参照）

ロ　巻二十二　伺遠慮　（文政八年～天保九年）

壱　御印物・〔印判〕　一
弐　御出之節間違　六
三　御家老御用人并重役江無礼　一
四　〔御献上・日之丸・御進物〕　〇
五　諸御礼・披露違・〔着服違〕　二
六　〔御名代・御召物〕　〇
七　〔御台所廻り〕　〇

八　〔諸断〕・諸通用・〔御請〕　二
九　〔刀鞘走・慮外〕　〇
十ノ一　認違・遅滞・不吟味・間違・不心得・心得違・御書物・遅刻　二〇
十ノ二　子供并凡而家内又者家来之儀ニ付、門弟并弟子儀ニ付　八
十ノ三　高覧并見分之節無調法、武芸之儀ニ付心得違　五
十一　〔誓詞・御飛脚・登〕　〇
十二　〔御蔵・御鍵〕・湊・〔順違・目論違〕　一
十三　〔田方・山方・屋舗・夜廻り・養子〕　〇
十四　〔諸渡物・押物・御用達〕　〇
十五　組支配　五
十六　変・〔鐘〕・失物・〔咎人〕・盗賊・〔御預・遠慮・欠所・評定所〕・出奔　七

（詳細は表2を参照）

ハ　巻二十二上　（天保十年～弘化四年）

一　遠慮　二〇
二　慎　（三八）
（三　御呵押込）
（四　出座定）
（五　町在之者追放ニ付御家中遠慮）
（六　町役在役浦々凡而町在之もの御呵、附黒石家中浪人共）

（詳細は表3を参照）

ニ　（巻二十二下　天保十年～弘化四年、付・慶応三年、一～十欠）

十一　誓詞・〔御飛脚〕　五
十二　〔御蔵・御鍵・湊・順違〕・目論違　一
十三　〔田方・山方・屋敷・夜廻・養子〕　〇
十四　〔諸渡物・押物・御用達〕　〇
十五　組支配　三
十六　変・〔鐘〕・失物・咎人・盗賊・〔御預・遠慮・欠所・評定所〕・出奔、家来之儀ニ付遠慮　一八
十七　伺遠慮諸事　二

（詳細は表4を参照）

このうち、イとロが文政八年から天保九年まで、ついでハとニが天保十年から弘化四年までの記録であり、それぞれが一組をなすことは一目瞭然である。ハの後半とニの前半が虫くいのため、閲覧できず、不分明なところはあるが、それぞれイとロから推測しうるところが多い。すでに紹介した弘前市立弘前図書館所蔵本の構成も参照されたい。

いずれも余白がしばしば見られ、必要に応じて該当例を増補していくようになっていた。標題のみの〔　〕で示した箇所はその典型である。

念のため、同一事件または関連事件が収載されている例を指摘しておく。

表1　イ　巻二十二（文政八年～天保九年）

	一	二	三	四	五	計
文政八		2・3				二
九			41			一
十		4				一
十一		5～7	29		43～45	七
十二		8～13	30・38		46	九
天保元	1	14・15	31		47～49	六
二		16～24	32・33		50	一二
三			34			一
四		25・26			51	三
五						〇
六		27				一
七						〇
八						〇
九		28	39～40・35～37		52	八
計	一	二七	一三	〇	一一	五二

表2　ロ　巻二十二　伺遠慮（文政八年～天保九年）

	壱
文政八	53
九	
十	
十一	
十二	
天保元	
二	
三	
四	
五	
六	
七	
八	
九	
計	一

イでは6・29・45、12・13、28・36、39・40。
ロでは55・56、65・66、77・78、109・110。
ハでは121・140、143・144、145・146、148・149、150～153、161・162。
ニでは204・205、214・215・216・217、218・219、220・221・222、225・226、なお228・229。

	十六	十五	十四	十三	十二	十一	十ノ三	十ノ二		十ノ一	九	八	七	六	五	四	三	弐
六							93・94	85		65〜67								
四								92		68		63			61			
三		99								69・70								
五								86		71〜73								
七										74・75		64			62			54〜56
八								87・88	80	76〜78							60	57
九		100					95	89〜91	81〜83	79								
三										84								58・59
二		101・102																
〇																		
一					98													
一		103																
一	106																	
八	107〜110	104・105					96・97											
五八	七	五	〇	〇	一	〇	五	八		二〇	〇	二	〇	〇	二	〇	一	六

表3　ハ　巻二十二上（天保十年～弘化四年）

	一	二
天保十	111	
十一	128～130	
十二	112・113	131～135
十三	114～119	136・137
十四		138・139
弘化元	120～122	140～149
二	123～125	150～160
三	126・127	161～168
四	二〇（三八）	五八
計	一	〇
	三	七
	八	二
	一三	一四
	一〇	

表4　ニ　巻二十二下（天保十年～弘化四年）

天保十	十一	十二	十三	十四	弘化元	二	三	四	慶応三		
十一	201									五	二
十二	204・205									一	〇
十三	202・203									〇	二
十四										〇	〇
十五		207								三	三
十六	210	211								一八	一
十七		212	228							二	二
		213									二
		214～227									一六
		206									
		208									
		209									
		229									一
											二九

本稿は、一九九〇年度大阪経済法科大学研究奨励金による成果の一部である。